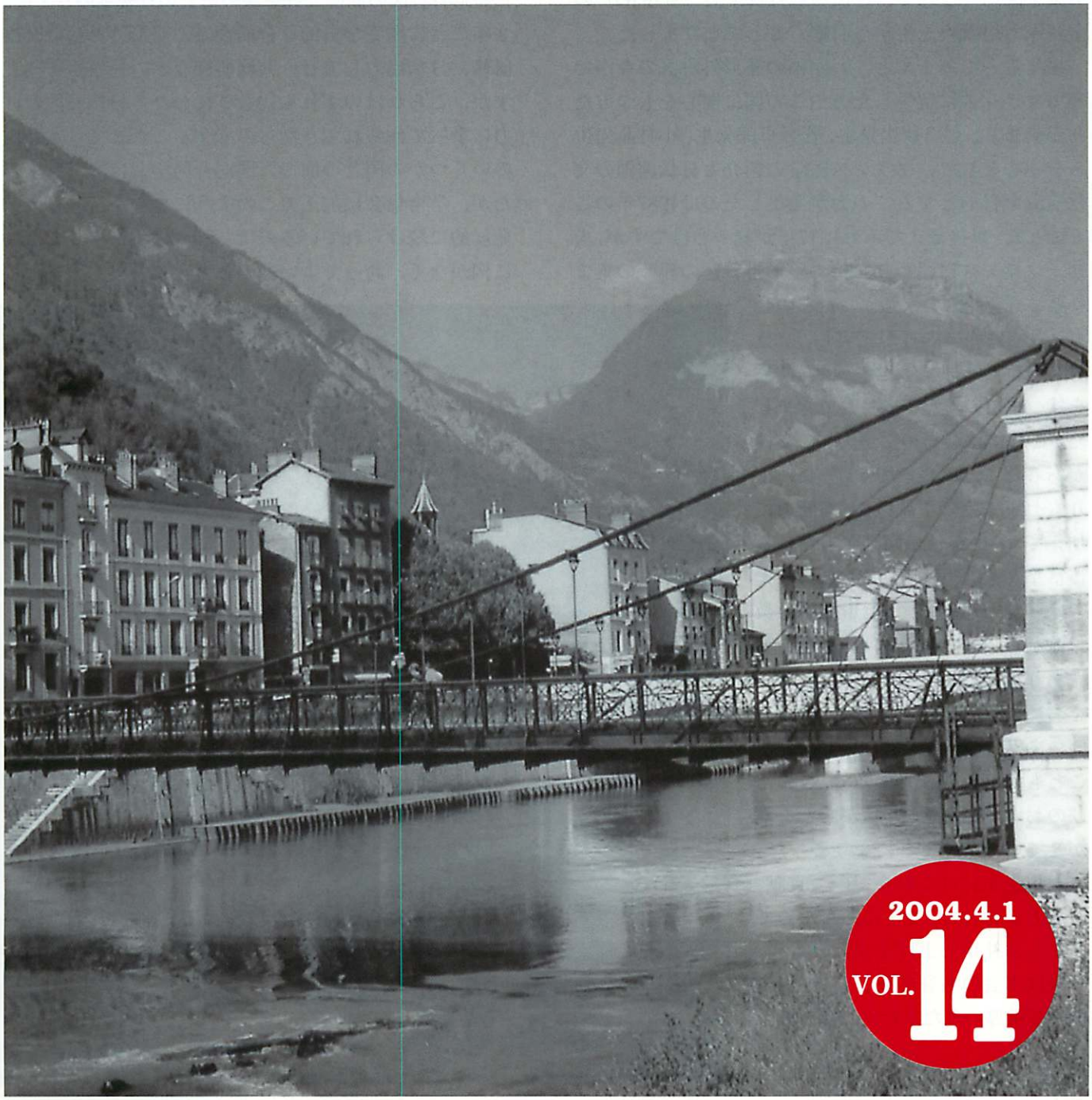
INFOS
日仏整形外科学会広報誌 アンフォ

Société Franco-Japonaise d'Orthopédie 日仏整形外科学会

■会長……小野村敏信　■副会長……小林　晶
Président ―― T. ONOMURA　Vice-Président ―― A. KOBAYASHI
■書記長……瀬本喜啓　■書記・会計……大橋弘嗣　弓削　至　青木　清　藤原憲太
Secrétaire général ―― Y. SEMOTO　Secrétaire et Trésorier　H. OHASHI　I. YUGE　K. AOKI　K.FUJIWARA

■事務局：〒569-8686　大阪府高槻市大学町２－７　大阪医科大学整形外科学教室内
Tel.(072)683-1221 代表（内)2364　Fax.(072)682-8003
Bureau : Dept. of Orthopaedic Surgery, Osaka Med. College, Takatsuki, Osaka 569-8686 JAPON

■発行所：〒530-0012　大阪市北区芝田2－10－39　大阪府済生会中津病院（編集者:大橋弘嗣）
Tel.(06)6372-0333　Fax.(06)6372-0039
Maison d'édition: Saiseikai Nakatsu Hospital, Shibata, Kita-ku,2-10-39 Osaka 530-0012 JAPON（Éditeur : H. OHASHI）
■ホームページアドレス：http://www.sofjo.gr.jp



2004.4.1
VOL.14

［会長就任のご挨拶］

実りある学会とするために力を結集してゆきましょう

七川先生に心からお礼申し上げます

昨年9月、グルノーブルでの第7回日仏整形外科合同会議を区切りとして、日仏整形外科学会（SOFJO）の会長を七川歓次先生から引継ぐことになりました。

振り返ってみますと、わが国の整形外科医のなかで嘗てフランスに留学した方やこの国に関心をもつ方たちが集まり、七川歓次先生、菅野卓郎先生、小林晶先生らを中心として、フランス医学の紹介と日仏両国の文化交流を目的とするこの会が発足したのは1987年のことでした。以後数えてみれば17年が経つわけですが、当初、フランスに関わりを持つ整形外科医の親睦の集まりという意味合いが強かったこの会も、次第にその内容が充実し、フランスの整形外科学会と準公的な関係を持つまでに着実に成長してきました。これには会員のご努力、ご支援があったことは当然ですが、なによりも七川先生のご見識、ご判断力に加えて、先生が日仏両国にもたれる豊富な人脈に助けられるところが大きかったと思います。七川先生は数年前からときに辞意を洩らされる事もありましたが、そのたびにご留任をお願いしてまいりました。しかしいつまでもご無理をお願いし続けることもはばかられますので、このたびのお申し出を機に、私があとを継がせていただくことになりました。

七川先生にはこれまでのご貢献、ご努力に対して、ここにあらためて心からお礼申し上げますとともに、今後は本会の名誉会長として、引き続きご指導いただきたいと願っています。

有意義で楽しい会であるように、運営をはかっていきたいと思います

さて、ご存じのように、現在われわれの学会には、日仏整形外科医の間の友好を深めるという基本のうえに、２年ごとに開く学術的な合同会議、整形外科医の交換研修、日仏協力して行う共同研究などの仕事がありますが、こられはいずれも10数年にわたる日仏両国の努力によって作られてきたものです。これまで日本と他のいくつかの国との間で二国間合同学会はもたれましたが、学術集会に加えてこのように少なからぬ事業が発展的に続けられているのは、私の知るかぎりでは他に例がなく、誇ってよいものと考えています。これら

小野村　敏信

の事業を今後更に継続、発展させて行くことがわれわれの願いですが、医療経済をめぐる諸問題、卒前卒後の医学教育、特に研修制度の大きな転換、社会的な不況をなどが学会運営を取巻いています。200名に満たない会員数で会とその仕事を維持してゆくのは決して容易なことではなく、より一層の努力が必要であることは申すまでもありません。

幸い本学会は小林副会長、瀬本書記長、大橋、弓削両書記をはじめとして、フランス整形外科との交流に情熱を傾けてこられた会員の方々に恵まれております。会員の皆様のご協力を得て、学術交流の内容を更に高めることに務めるとともに、有意義でかつ楽しい会であるように、非力ではありますが運営をはかって行きたいと思っています。

●第7回日仏整形外科学会にて

知るべきこと、学ぶべきことが多いフランス文化

私自身はフランス留学の経験は持ちませんが、約30年前から主として専門領域の脊椎外科を通してフランス整形外科医との交流を深めてまいりました。整形外科の歴史の中でフランスは非常に重要な位置を占めてきていますが、近代の日本の整形外科では、ドイツやアメリカとの関係に比べて、日仏間の交流はきわめて限られたものでした。私は自分自身の経験から、フランスの現在の整形外科そしてその背景にあるフランスの文化については、知るべきこと、学ぶべき点の多いことを知り、そしてフランス側には同じように日本を知ってほしいという思いから、若い人たちにフランスで学ぶことを奨めてきました。フランスと日本はまったく異なる歴史、風土を持つ国ですが、理解し合える共通した感性があるのではないかと思います。

●総会で挨拶される小野村会長

フランス側にもいろいろと悩ましい問題はあるようです。通信や交通の手段は随分と発達しましたが、なにか急ぎの連絡を取ろうとすると日本とフランスとの間には単に距離のみではない違いを感じることがあり、事務局が悩まされることもしばしばでした。一時は混乱していたフランス側の事務局も新しく組みなおされましたので、今後はより緊密な積極的な意志疎通ができるようになるものと期待しています。

ご支援とご協力をお願い致します

昨年9月のグルノーブルでの合同会議には日本から50名をこえる参加者があり、有意義で楽しい時間を過ごすことができました。次回の第8回日仏整形外科合同会議は来年（2005年）日本で、瀬本喜啓先生を会長として行われることになりました。これまでと同じように多数のフランス整形外科医を迎えることと思いますが、実りある学会とするために力を結集してゆくことが当面の仕事であると考えております。

今後、この会の運営に、会員皆様の一層のご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。

第7回
AFJO

第7回日仏整形外科合同会議

第7回合同会議の主題は「コンピュータ支援手術」

第7回日仏整形外科合同会議（Association France-Japon d'Orthopédie）は2003年9月26～27日、フランスのグルノーブルで開催された（写真1）。今回の議長はグルノーブル大学整形外科Philippe Merloz教授で、主題は「コンピュータ支援手術」(Computer assisted surgery）であった。

演題は全部で61題で、議長講演、特別講演それぞれ1、主題13、股関節14、膝関節14、外傷・小児整形外科10、その他8であった。国別では、わが国から28題、フランスからは33題であった。以下、演題を概説するが、筆者が聞いたものが主で、全部を網羅できなかったことを了承願いたい。

ナビゲーションシステムの有用性と今後の課題

最初は議長講演で、Merloz教授が脊柱を中心にした多数の経験を、「Basic concepts for computer assisted orthopaedic surgery」と題して約30分にわたり話した。総論的な歴史、器具の発達、ハードウエアとソフトウエアの解説などを述べ、今やこのシステムは研究者の努力によって各分野に浸透しつつあり、広いデータベースにアクセスできて、教育用のネットワークも使用されている。今後、1つのハードウエアで異なるシステムに共用できるようになることを希望すると結んだ。

主題についてまとめると、ナビゲーションシステムは人工関節置換術、椎弓根スクリュー固定術、仙腸関節固定術、膝前十字靱帯再建術、髄内釘による骨接合術の遠位スクリュー固定術、骨切り術などに使用されている。今までの手術にくらべると、たとえば椎弓根固定では不良位固定が10～40%であったものが6%にまで低下し、人工膝関節の機能軸は従来72%だけが希望どおりできただけであったが、94%の症例で180±3と、より正確に決定可能であった。また、前十字靱帯再建術での移植靱帯の等尺性変位は12mmから3mmまでに減少している。菅野（阪大）は人工股関節の脱臼防止のため臼蓋側カップの傾斜、前捻をこの方法で正確に設置して、脱臼が少なくなったと報告した。確かに有用性は認められるが、今後の課題は最小侵襲法がどの程度まで可能になるか、器械の改良、それに価格の低下などであろう。

●Fort de Bastilleよりみたグルノーブル市

それぞれの分野で活発な報告

一般演題をみると、まず膝関節の部では11題が人工関節（TKA）で占められた。新しい機種ならびに機種間の比較、後十字靱帯温存か全切除か、高位脛骨骨切り術後のTKAなど、どの国でも論議の的になっている共通の問題が討論された。これ以外には、星ら（高岡整志会病院）が半月板切除後の骨壊死の発生、井原（九州労災病院）は内側半月板後角部の断裂がラスピングのみで良好な成績であったことを報告した。

股関節の部でも、人工関節（THA）が話題の中心で9題あった。再置換の問題、感染・脱臼・弛みなどの術後合併症などが討論された。大腿骨壊死に対しては、藤原ら（西神戸医療センター）は有茎腸骨移植、金城ら（大阪市大）は血管柄付遊離腓骨移植を行い良い結果を得ている。また、矢吹ら（慶大）は全身性エリテマトーデス（SLE）における骨壊死の発生、進展について概説した。このほか、安永ら（広島大）は寛骨臼回転骨切り術の中高年者と若年者の成績比較、柳本ら（慶大）はChiari骨盤骨切り術の長期成績を発表した。

外傷・小児整形外科の部では、Steib（Strasbourg）, Delécrin（Nantes)らがthoracoscopyとナビゲーションシス

福岡整形外科病院　小　林　　晶

テムを使用し胸腰椎の椎体切除、ヘルニア摘出、椎体固定を行い、ナビゲーションの有用性を力説した。滝川ら（大阪府三島救命救急センター）、Tonettiら（Grenoble）は骨盤環骨折にそれぞれM型腸骨間プレート、virtual simulatorを作成して有用であったとし、とくに後者は教育用に使用して好評であるという。Cunyら（Metz)は上腕骨近位端骨折において結節部でロッキングするLINASスクリューを使用して、低侵襲で良好な固定が得られたと報告した。

小児整形外科では、今井ら（大阪市大）は先天股脱（DDH）に対する超音波法とMRIの比較・検討を行い、Cottalordaら（St-Etienne）はcomputer aided designによる側弯症装具の作製を行い、学童のランドセルの負担は両方にバンドを平等にかけることによって軽減することを証明し、片側のバンドのみで背負わないよう警告した。

上記以外の演題では、橈骨遠位端骨折予防にcalcium phoshateを経皮的注入する実験（Liverneaux,Rochefort sur Mer)、尖足に対するアキレス腱移行術（瀬本ら（大阪医大))、脳卒中後の骨密度と骨代謝（石川（東大阪病院))、肩甲骨離断後に切断肢からの遊離骨筋肉皮弁での断裂被覆（小山内ら（山形大))、上腕二頭筋長頭腱断裂を合併する肩腱板断裂の治療（吉川ら（滋賀医大))、人工足関節（Asencioら（Nimes))などがあり、最後にCaton（Liyon）がフランスにおける医事紛争について述べた。これによると、フランスでも紛争が増加し、とくに整形外科にとって人工関節置換術における感染が問題になることが多い。しかし、コントロールできない不測の事態に対しては、医師側の断固とした無責任の証拠があれば問題がなくなっているという主旨であった。

特別講演は筆者が「膝関節に名前を残した2人のフランス人医師ーGerdyとSegond」と題し約45分にわたって述べた。

会議演題は1日半の中で行われ、討論時間が短くなり、講演の後で各自質疑という日本的な場面も多かった。しかし、主題の選択は時代に即したものであったし、演題もバラエティに富んだものであった。

●会場風景

次回京都での会議に多数のご参加を

今回は質素な会議で、抄録は前もって会員にメールで送られ、会場ではCDに記録したものをわたされた。会場もグルノーブル南大学のcomedical staff養成学校の講堂と教室が使用され、近くのホテルで簡素な昼食をとって行動しやすいように配慮されていた（写真2)。

ようやくこの会議の運営に両国とも慣れて、外国語が苦手な国民同士では英語が共通語として定着している。大きなトラブルもなく終了したことは誠に喜ばしい。フランスでの恒例の行事として会議前日に懇親カクテルパーティ、第1日の夜は近郊のサスナージュ城（Châúteau de Sassenage）で、第2日の夜は中世の貴族の館を改造した、リヨンのクール・デ・ロージュ（Cour des Loges）での晩餐会が豪華に開催され深更に及んだ。

今回の日本側からの参加者は73名（うち同伴者16名)、フランス側からは40名であった。

次回は2005年京都で大阪医大・瀬本喜啓助教授の会長のもとに開催される予定である。多数のご参加を期待する次第である。

なお、今回からはSOFJO（Société Franco-Japonaise d'Orthopédie）の執行部が交代し、七川歓次名誉会長、小野村敏信会長、筆者が副会長、瀬本喜啓書記長と新体制になったことを付記しておく。

（[臨床雑誌　『整形外科』55巻・3号（3月号,第644冊）2004年3月1日]より転載）

第7回
AFJO

第7回日仏合同整形外科学会に参加して
学会参加印象記

この度平成15年9月26・27日に、フランス・ローヌアルプ地方グルノーブルにて開催された7th AFJOに同大学の大橋先生・今井先生と共に参加させていただきましたのでその報告をさせていただきます。

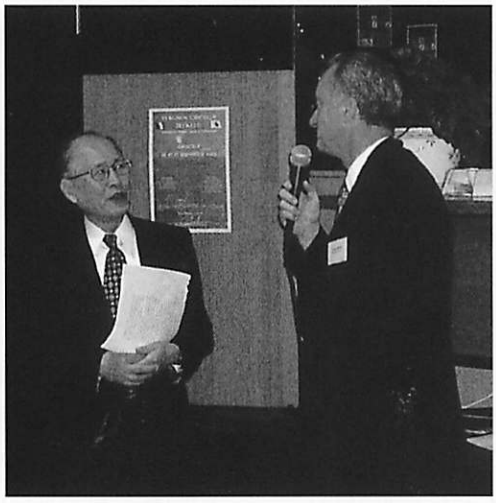
「フランスに行けるよ。」と言う言葉に誘われるがまま、(やや不純な動機ではありますが) 抄録を提出し、あとは流れに身をまかせ、気がつけばAir Franceに乗っていました。

もちろん私にとっては初めてのヨーロッパで且つ初めての英語での口演ということもあり準備万端と行きたかったのですが、もちろんそうは問屋が卸さず、Air Franceの中でもまだ必死にスライドの修正をしていました。

前日にグルノーブルに乗り込み、学会に先立って今回のAFJOの主題でもあるComputer Assisted Orthopaedic Surgery (THAのnavigation surgery) の手術見学をさせて頂きました。

海外の手術室に入るのも初めての経験で何もかもが驚きでしたが、まず更衣室が男女共用であること、靴は脱がずにカバーだけ (革靴だったので少し大変でしたが)、THAにも関わらず (プライベートホスピタルであるというのが理由だったそうですが)、医師一人とアシスタント一人の計二人でnavigation surgeryを行っていたことは、最も驚きでした。

●Merloz先生


●Merloz先生と小林先生

●学会会場前で
左から高橋先生、小野村先生、瀬本先生、大橋

●器械展示コーナー

●学会会場

大阪市立大学大学院医学研究所整形外科　金　城　　養　典

●グルノーブルの街並み

学会の内容としましては主題にもある通り、navigation surgeryを中心に活発な発表・討論がされており非常に感銘を受けました。個人的には、CTガイドの要否についての討論について非常に印象深く記憶しております。

私たちは、大橋先生がImpaction Bone Grafting、今井先生がDDHに関して、そして私はOsteonecrosisに対するVascularized Fibular Bone Graftの成績について発表させていただきました。初めての英語での口演ということでものすごく緊張していましたが、しどろもどろになりながらも何とか質問も聞き取れ回答することもでき、本当にいい経験をさせていただきました（児玉さん、本当に有難うございました）。

そしてフランスといえばやはり料理が非常に印象的ですが、学会の前日にはWelcome Partyの後日本から参加されている幹事の先生方とともにレストランで、第一日目の晩にはお城での夕食会、第二日目にはリヨンに戻り、４つ星ホテルの３つ星レストランでの晩餐会（あのフォアグラは忘れられません）とこれぞフランス!!といったご馳走を堪能させていただき、おかげで日本に帰ってからもめっきり食事の量が増えてしまいました。

今回の学会参加を通じていろいろな方と医学はもちろん、それ以外に関しても興味深いお話をさせていただき、なかなか日本での日常生活では経験できない様々な経験をさせていただき、この場をお借りしまして、関係者の先生方・スタッフの皆様方に厚くお礼を申し上げます。

次回は2005年に京都で開催される予定だそうです。是非私もこのすばらしい学会に参加したく思います。

●ぶどう畑

第7回AFJO プログラム

THURSDAY SEPTEMBER 25th 2003

18H00 –21H00 **WELCOME RECEPTION at the Hôtel (DAUPHITEL)**

FRIDAY SEPTEMBER 26th 2003

08H00 WELCOME and OPEN CEREMONY

08H30 Basic Concepts for Computer Assisted Orthopaedic Surgery
Philippe MERLOZ

09H00 First Session : COMPUTER ASSISTED ORTHOPAEDIC SURGERY

President : T. ONOMURA (Osaka)
Moderator : J. TROCCAZ (Grenoble)

09H00 Computer-assisted spine surgery
S. EBARA, J. TAKAHASHI, I. NAKAMURA, H. HIRABAYASHI, J. KITAHARA
Dept of Orthopaedic Surgery, Shinshu University School of Medicine - Matsumoto

09H15 MRI-guided aspiration of intradural cysts
S. TAKAHASHI, S. MORIKAWA*, Y. SARUHASHI, Y. MATSUSUE
Department of Orthopaedic Surgery and Molecular Neuroscience Research Center*,
Shiga University of Medical Science - Shiga

09H30 Enlarging the Adaptation of MED Technique with the support of Computer Navigation System
H. OKA, M. HIRAKAWA, T. NAONO
Oita-Oka Hospital, Department of Orthopedic Surgery - Oita
T. YOSHIIWA, K. KUMA, H. TAIRA
Oita Medical University, Department of Orthopedic Surgery

09H45 Computer Assisted Knee Surgery : What do we need ?
D. SARAGAGLIA
University Department of Orthopaedic Surgery, Hôpital Sud - Grenoble

10H00 Navigated Total Knee Arthroplasty
I. MORIYAMA
Division of Orthopaedic Surgery, Saiseikai Utsunomiya Hospital, Tochigi
M. KAWAKUBO
Dept. of Orthopaedic Surgery, Tokyo Dental College Ichikawa General Hospital - Chiba
University Department of Orthopaedic Surgery, CHU La Cavale Blanche - Brest

10H15 Total Knee Arthroplasty with the Surgetics workstation Bone Morphing : A CT less approach with accurate intra-operative 3D Shape Reconstruction
E. STINDEL
University Department of Orthopaedic Surgery, CHU La Cavale Blanche - Brest

10H30 Robot assisted Total Knee Arthroplasty with ROBODOC® surgical system
A. KAKIMOTO, N. SUGANO, N. NAKAMURA, N. MURATA, M. YAMAMURA
Department of Orthopaedic surgery, Kyowakai Hospital
H. YOSHIKAWA, T. OCHI
Department of Orthopaedic surgery, Osaka University Graduate School of Medicine - Osaka

10H45 COFFEE BREAK

11H15 Second Session : COMPUTER ASSISTED ORTHOPAEDIC SURGERY

President : Ph. CINQUIN (Grenoble)
Moderator : S. TAKAHASHI (Shiga)

11H15 Early clinical results with computer guided the FINE total knee arthroplasty
T. NAKAMURA, T. SUGURO, Y. KANAI, K. KOUGAME
Department of Orthpaedic Surgery, Toho University - Tokyo

11H30 ACL Navigation
R. JULLIARD, S. PLAWESKI
Clinique Mutualite des Eaux Claires - Grenoble
University Department of Orthopaedic Surgery, CHU A. Michallon - Grenoble

11H45 CT-based navigation for total hip arthroplasty decreases the postoperative dislocation rate
N. SUGANO❶, T. NISHII❶, H. MIKI❶, H. YOSHIKAWA❶, T. SASAMA❷, Y. SATO❸, S. TAMURA❷, T. OCHI❶
Osaka University Graduate School of Medicine - Osaka
❶ Department of Orthopaedic Surgery ,
❷ Division of Interdisciplinary Image Analysis ,
❸ Division of Robotic Therapy,

12H00 Robots : To do what ? For what kind of surgery ?
J. TROCCAZ
TIMC Lab, IMAG, Joseph Fourier University - Grenoble

12H15 Principle and Concepts of Computer Assisted Surgical Protocols in Surgetics Systems
S. LAVALLEE - Grenoble

12H30 Virtual Orthopaedic European University
Ph. CINQUIN
University Department of Medical Computer Sciences, CHU A. Michallon - Grenoble

12H45 Discussion

13H00 – 14H00 **LUNCH**

14H00 GERDY et SEGOND :
Deux Chirurgiens français qui ont donné leur nom à la chirurgie du genou
Akira KOBAYASHI - Fukuoka

14H50 Third Session : KNEE SURGERY

President : A. KOBAYASHI (Fukuoka)
Moderator : Ph. NEYRET (Lyon)

14H50 Osteonecrotic Condition on Magnetic Resonance Imaging Following Arthroscopic Partial Meniscectomy in Osteoarthrosis
T. HOSHI, Y. NAKATA, T. ITABASHI, K. NAKAHARA, T. KAWAGISHI
Takaoka Seishikai Ortopaedic Hospital - Takaoka

15H00 Healing of radial Tears of the Posterior Horn of the Medial Meniscus by Rasping
H. IHARA
Bone Joint Center, Kyushu Rosai Hospital - Kitakyushu

15H10 Short-term Results of ALPINA Total Knee Arthroplasty - Comparison with Duracon and NexGen LPS TKAs
S. MATSUDA, T. OHDERA, A. KOBAYASHI
Fukuoka Orthopaedic Hospital - Fukuoka

15H20 Kinematics of TKA : Sliding or Rolling
M. BERCOVY, E. WEBER - Paris

15H30 Results of the ROCC TKA
M. BERCOVY - Paris

15H40 Total knee prosthesis computer assisted. Which knee center to determine mechanical axis in sagittal plan ? Consequences of different options
O. TAYOT, H. CHAVANE, J. BEJUI-HUGUES, JP. CARRET, and the SCOR Group - Lyon

15H50 Score prosthesis : early results. Comparison of a serie of 30 TKA computer assisted with 30 conventional TKA
O. TAYOT, H. CHAVANE, J. BEJUI-HUGUES, JP. CARRET, and the SCOR Group - Lyon

16H00 Septic and aseptic loosening of total knee arthroplasty treated with constrained prosthesis
E. HAVET, J. VERNOIS, S. DELPECH, P. MERTL, LM. COLLET
Picardie Jules Verne University Hospital of Amiens

16H10 The Unilateral knee Arthroplasty in Lateral knee osteoarthritis : a consecutive series of 81 arthroplasties
R. BADET, K. BOUATTOUR, C. BUSSIERE, T. AÏT SI SELMI, Ph. NEYRET - Lyon

16H20 Total knee arthroplasty ahter high Tibial Osteotomy
R. BADET, T. AÏT SI SELMI, C. BUSSIERE, Ph. NEYRET - Lyon

16H30 Anterior Cruciate Reconstruction combined with valgus Tibial Osteotomy ; long term Result
Ph. NEYRET, N. BONIN, T. AÏT SI SELMI, H. DEJOUR - Lyon

16H45 – 17H15 COFFEE BREAK

Fourth Session : TRAUMA and PEDIATRIC ORTHOPAEDICS

President : Y. SEMOTO (Osaka)
Moderator : J. COTTALORDA (Saint Etienne)

17H20 Videoassisted Thoraco lumbar Approach.
JP. STEIB, I. BOGORIN, X. CHIFFOLOT - Strasbourg

17H30 Removal of a calcified thoracic disc herniation combining thoracoscopy and 3D navigation.
J. DELECRIN, Y. PEREON, N. PASSUTI - Nantes

17H40 Stabilization of instable pelvic fractures using percutaneous ilio-transsacral screws and anterior fixation
JC. BEL, C. FALAISE, D. FORISSIER, L. EHRARD, G. HERZBERG
University Hospital Herriot of Lyon France Trauma and Orthopaedic Surger Department - Lyon

17H50 Unstable Pelvic Ring Fracture Fixed with the M Shaped Trans-Iliac Plate: Report of 2 cases
N. TAKIGAWA, S. NAKAOKA
Osaka Mishima Emergency and Critical Care Medical Center - Osaka

18H00 Virtual Simulator. An educational tool for Pelvic Surgery
J. TONETTI, L. VADCARD, P. GIRARD, R. MARTIN, Ph. CINQUIN, J. TROCCAZ, Grenoble

18H10 Light nailing with autostable screws (Linas) for proximal humerus fractures – Technique and Results for 63 cases.
Ch. CUNY, M. IRRAZI, P. BEAU - Metz

18H20 Internal fixation of femoral head fracture using a minimally invasive medial approach: Case Report
T. KAWASAKI , K. HARA , S. TAKAHASI , H. KANEKO , T. USHIYAMA , Y. MATSUSUE
Department of Orthopedic Surgery, Shiga University of Medical Science - Otsu

18H30 Comparison with ultrasonography and magnetic resonance imaging for developmental dislocation of the hip joint
Y. IMAI, T. KITANO, T. SAKAI, K. TAKAOKA
Department of Orthopaedic Surgery, Osaka City University Graduate School of Medicine - Osaka

18H40 Orthosis for Scoliosis : A Prospective Study comparing traditional plaster mould manufacturing with fast non contact 3D acquisition
J. COTTALORDA, R. KOHLER, CH. GARIN, C. POURRET, P. GENEVOIS, C. LECANTE
Saint Etienne ; Lyon

18H50 Influence of school bag carrying on gait kinetics
J. COTTALORDA, A. RAHMANI, M. DIOP, V. GAUTHERON, S. BOURELLE, A. BELLI
A. GEYSSANT - Saint Etienne

19H30 Adjourn

20H30 – 23H30 PRESIDENT OFFICIAL CONFERENCE DINNER
Château de Sassenage
Bus departure from the hôtel at 20H00

SATURDAY SEPTEMBER 27th 2003

08H00 Fifth Session : HIP SURGERY

President : H. OHASHI (Osaka)
Moderator : Ch. PICAULT ; JP CARRET (Lyon)

08H00 Rotational acetabular osteotomy in patients older than 46 years of age - A comparison with younger patients
Y. YASUNAGA, T. HISATOME, T. YAMASAKI, M. OCHI
Department of Orthopeadic Surgery; Hiroshima University School of Medicine - Hiroshima

08H10 Long terms results of Chiari's pelvic osteotomy (more than 10 years follow-up)
S. YANAGIMOTO, H. HOTTA, Y. YABUKI, T. SASAKI, A. FUNAYAMA, T. SAKAMAKI
Department of Orthop. Surg., Keio University - Tokyo

08H20 Horizontal cutaneous lines in standing position for THA
T. YAMAKAWA, S. HOSOI
Yamada red-cross hospital, Department of orthopedics - Mie

08H30 Evaluation of dislocation factors after total hip arthroplasty
T. SASAKI, S. YANAGIMOTO, H. HOTTA, Y. YABUKI
Department of Orthopaedic Surgery, Keio University - Tokyo
A. FUNAYAMA, T. SAKAMAKI
Department of Orthopadic Surgery, National Center for Child Health and Development

08H40 Dealing with double mobility in THA repeated dislocation
JP. LANTUEJOUL - Grenoble

08H50 Modified impaction grafting technique for revision THA with difficult femoral reconstruction
H. OHASHI , Y. KADOYA , A. KOBAYASHI , Y. KANESHIRO , K. TAKAOKA
Department of Orthopaedic Surgery, Osaka City University Medical School - Osaka

09H00 Press fit versus Distal locking of cementless stem in extended femoral approach for THR severe failures
Ch. Picault - Lyon

09H10 Mid-term results of new KKS non-cement THA system
H. HOTTA, S. YANAGIMOTO, Y. YABUKI, T. SASAKI, A. FUNAYAMA, T. SAKAMAKI
Department of orthopaedic surgery, Keio university school of medicine - Tokyo

09H20 Planification des PTH (30 ans d'expérience) ; du croquis au programme informatique
A. RAY - Lyon

09H30 Orientation de la cupule acétabulaire en PTH ; Importance de la pose première de la pièce fémorale d'essai
A. RAY - Lyon

09H40 Vascularized Pedicle Iliac Bone Graft for the Treatment of Aseptic Necrosis of the Femoral Head
Revascularization of the necrotic area, does it really occur ?
M. FUJIWARA ; Dep.of Orthopedic Surgery,Nishi-Kobe Medical Center - Kobe
N. IKEDA ; Dep.of Orthopedic Surgery, Tamatukuri Kouseinennkinn Hospital

09H50 Treatment of osteonecrosis of the femoral head with modified vascularized free fibular bone grafting
Y. KANESHIRO, H. OHASHI, H. GOTANI, Y. KADOYA, K. TAKAOKA
Department of Orthopaedic Surgery,Osaka City postgraduate school of medicine - Osaka

10H00 Prospective study in idiopatic osteonecrosis of the femoral head in SLE
Y. YABUKI, S. YANAGIMOTO, H. HOTTA, Y. TOYAMA
Department of Orthopedic Surgery, Keio University - Tokyo

10H10 Tige fémorale sur mesure non cimentée pour séquelle de développement dysplasique de hanche. Etude de 2 à 12 ans de recul
X. FLECHER, JN. ARGENSON, JM. AUBANIAC
Université de la Méditerranée, Service de Chirurgie Orthopédique, CHU-Sud Hopital Sainte-Marguerite - Marseille

10H25 COFFEE BREAK

10H50 Sixth Session : MISCELLANEOUS

President : T. ONOMURA (Osaka)
Moderator : Ph. MERLOZ (Grenoble)

10H50 Percutaneous cementing to prevent osteoporotic distal radius fracture using a calcium phosphate bone substitute : anatomical study in 20 wrists
P. LIVERNEAUX, Department of orthopedics, St Charles hospital - Rochefort sur Mer

11H00 Antero-superior transposition of Achilles tendon attachment for dynamic pes equinus
Y. SEMOTO , K. FUJIWARA , M. KINOSHITA , M. ABE
Department of Orthopedic Surgery, Osaka Medical College - Osaka
T. ONOMURA ; Kyoritu Rehabilitation Hospital

11H10 Bone mineral density and bone metabolism of hemiplegia patients with strokes.
S. ISHIKAWA
Department of Rehabilitation, Higashi Osaka General Hospital - Osaka

11H20 Forequarter amputation wound coverage with an osteomyocutaneous free flap from the amputated extremity.
T. OSANAI, H. KASHIWA, A. ISHIKAWA, M. TAKAHARA, T. OGINO
Department of Orthopaedic Surgery, Yamagata University School of Medicine - Yamagata

11H30 Clinical Results of Rotator Cuff Tears Associated with Injuries of the Long Head Biceps Tendon
G. YOSHIKAWA, K. HORI, H. KANEKO, Y. MATSUSUE
Department of Orthopaedic Surgery, Shiga University of Medical Science - Shiga
M. MURAKAMI ; Murakami Orthopaedic Clinic

11H40 The deformity in TKR : The extra articular component.
JL. BRIARD - Rouen

11H50 TKR in patients with gonarthrosis after tibial or femoral fractures. A review of 29 cases.
Y. CATONNE, D. RIBEYRE, N. CHARLOT - Paris ; Fort de France

12H00 Evaluation of the passive computer assisted system (Ceravision) with "Bone Morphing" for realisation of Total knee Prothesis.
D. Van Driessche ; Hôpital Henri Mondor - Creteil

12H10 The Orthopilot Trauma Project
Th. GAUTHERON, F. LEITNER - Moutiers ; Grenoble

12H20 The AES Prostesis, Ankle Prostesis of primary and revision indications.
G. ASENCIO, C. LEONARDI - Nimes

12H30 Recent evolution of the proof in French health Law.
J. CATON - Lyon

13H00 Adjourn and LUNCH

17H00 Departure from the hôtel to LYON by bus
(one hour drive)

第7回AFJO リヨン　グルメ報告

「幸せな夕食会でした！」

●大阪府済生会中津病院　大橋　弘嗣
●大阪医科大学　瀬本　喜啓

学会の最終日、グルノーブルからバスでリヨンに向かいました。山々の間の道を進んでいくとやがて山が後ろになり、代わりに麦畑が広がってきました。少しずつ建物が増えればリヨンの街に到着です。

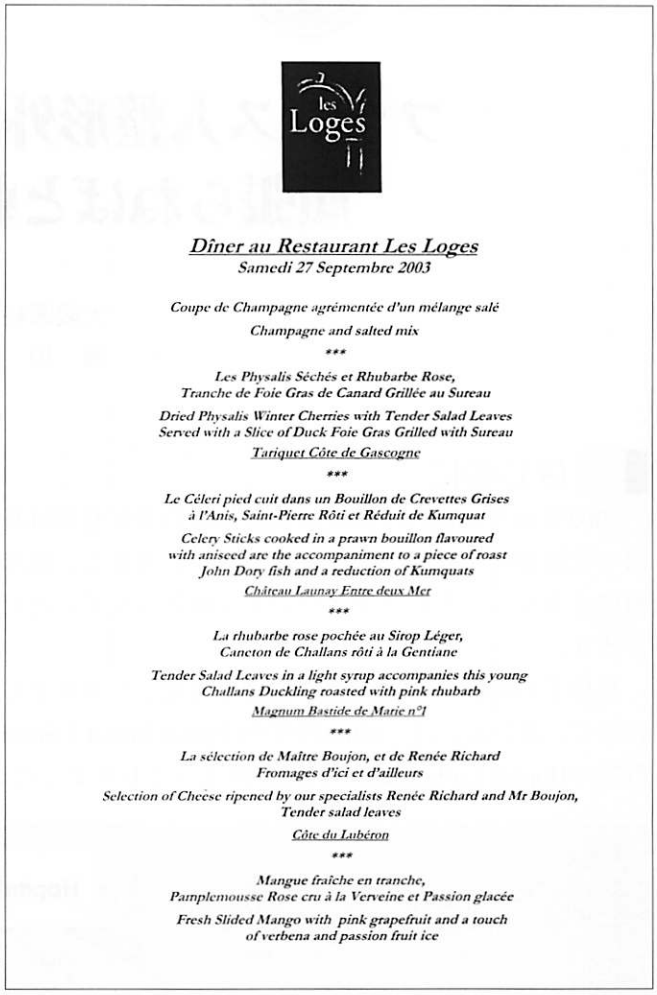
★★★

今夜の夕食はリヨンの旧市街の真ん中にある17世紀の建築を残すホテルCour des Logesのメインレストラン Les Logesです。以前はこのホテルにはメインレストランがなく、数年前に腕を見込まれたシェフがホテルに引き抜かれ、ロビーの奥まったところで料理を提供していましたが、この日はロビー一杯にテーブルが並べられ、私たち日仏合同会議参加者で貸し切りです。なんと、この日でシェフが独立し、新しい自分の店に替わるとのことでこのお店でのもてなしの最終日でした。

★★★

コース料理は食前酒のシャンパンに始まり、前菜は口の中でとろけるようなフォアグラのあぶり焼きで、これを食べただけでもリヨンに来た甲斐がありました。魚料理はマトウダイのポワレ、そして肉料理は小鴨。魚は新鮮でアニスの香りのするソースがかかった上品な一品でした。小鴨の胸肉は薄切りにされ、甘酸っぱいソースがよく合っていました。鴨にはよくオレンジソースが用いられますが、オレンジではなく赤酸塊（あかすぐり）のようでした。そのあとはフロマージュ（チーズ）でしたが、フランスのフロマージュは300種以上あるといわれ、その地域の特産のチーズを味わうことができます。この夕食会でも、牛

写真左から
●最終日、リヨンでの夕食会
●リヨンの三つ星レストラン
●当日のメニュー



les Loges

Dîner au Restaurant Les Loges
Samedi 27 Septembre 2003

Coupe de Champagne agrémentée d'un mélange salé
Champagne and salted mix
***
Les Physalis Séchés et Rhubarbe Rose,
Tranche de Foie Gras de Canard Grillée au Sureau
Dried Physalis Winter Cherries with Tender Salad Leaves
Served with a Slice of Duck Foie Gras Grilled with Sureau
Tariquet Côte de Gascogne
***
Le Céleri pied cuit dans un Bouillon de Crevettes Grises
à l'Anis, Saint-Pierre Rôti et Réduit de Kumquat
Celery Sticks cooked in a prawn bouillon flavoured
with aniseed are the accompaniment to a piece of roast
John Dory fish and a reduction of Kumquats
Château Launay Entre deux Mer
***
La rhubarbe rose pochée au Sirop Léger,
Caneton de Challans rôti à la Gentiane
Tender Salad Leaves in a light syrup accompanies this young
Challans Duckling roasted with pink rhubarb
Magnum Bastide de Marie n°1
***
La sélection de Maître Boujon, et de Renée Richard
Fromages d'ici et d'ailleurs
Selection of Cheese ripened by our specialists Renée Richard and Mr Boujon,
Tender salad leaves
Côte du Luberon
***
Mangue fraîche en tranche,
Pamplemousse Rose cru à la Verveine et Passion glacée
Fresh Slided Mango with pink grapefruit and a touch
of verbena and passion fruit ice

はもちろん山羊や羊のチーズなど、日本ではめったに食べられない珍味を味わいました。デザートはマンゴーと赤い果肉のグレープフルーツにパッションフルーツのアイスクリームが添えられていました。それぞれの料理毎にシェフが選んだワインが合わせられ、きれいに盛りつけられたおいしい料理と見事に調和して幸せな夕食会でした。

さすがのフランス人もこれほどの料理には勝てないようで、出てくる料理を次々と平らげていきます。おまけに小鴨料理に付け合わされたマッシュポテトは非常に木目細かく裏ごしされていて、マッシュポテトというよりマッシュクリームとでもいうほどの舌触りのよい、コクのある一品でした。あまりのおいしさに、年配のフランス人参加者は、おかわりまで頼む勢いでした。年齢的には若い私たちも顔負けの胃袋です。

★★★

ウエイトレスの一人に東洋人らしい女性がいました。まさかこんなところで働いている日本人はいないだろうと思いましたが、声をかけると日本語で返事が返ってきました。なんと日本から仕事を探してとうとうリヨンまでやってきたとのことでした。まあ、地球も狭くなったものですね。

そうこうするうちにお腹もふくれ、最後はエスプレッソです。いろいろな料理で満腹になった胃袋をぎゅっと引き締めてくれるようです。やはり最後はこれです。

楽しい食事会が終わり、フランスの先生方と別れを惜しみながら夕食会はお開きとなりました。

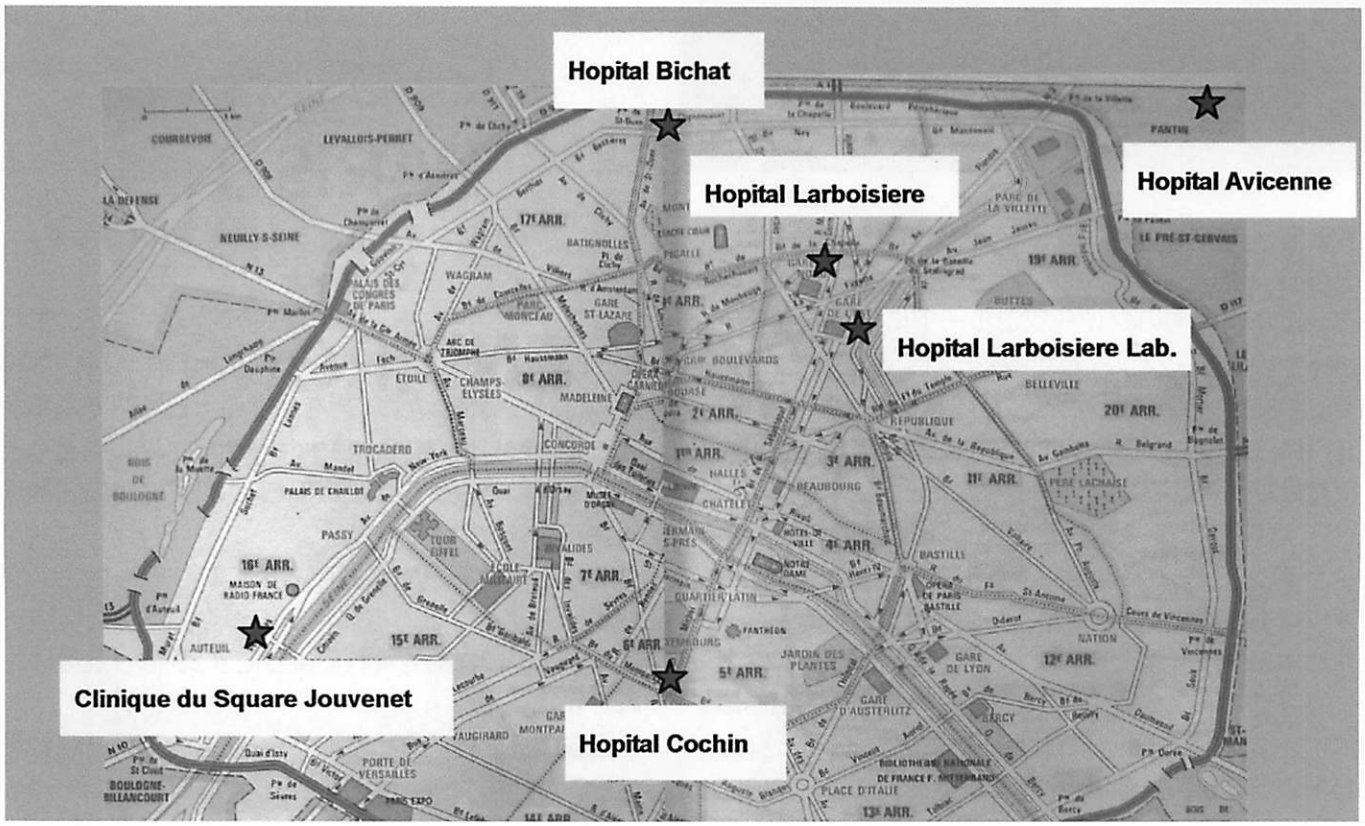
フランス人整形外科医に負けないよう、頑張らねばと刺激を受けました

大阪医科大学　整形外科
瀧　川　直　秀　　先生

はじめに

2002年10月から3カ月間、日仏整形外科青年整形外科医の交換研修生としてフランスのパリに滞在し、臨床研修をさせていただきましたのでご報告させていただきます。

私は手の外科と外傷関連の施設を希望しておりましたので、渡仏前には、Alnot教授のHopital BichatとSedel教授のHopital Larboisiereの訪問が決まっておりました。あと数施設は現地で交渉して行って下さいということでしたので、パリの整形外科医の友達に紹介していただき、追加でMasquelet教授のHopital Avicenneと有名な手の外科医が集まっているClinique du Square Jouvenetを主に訪問させていただく事となりました。いずれの病院もレベルの高い治療をされており、パリだけの滞在でしたが、フランス整形外科の神髄を見た気がいたします。



フランス到着

渡仏前にはフランス語の語学学校に通う間もなく、独学でフランス語の勉強をしていましたが、やはり実践ではなかなかすぐには思うように通じず初めは大変苦労しました。9月下旬、パリ到着後、最初の滞在先であるHopital Cochinはパリ市内セーヌ左岸の絶好のロケーションにありました。空港から道を聞きながら病院まで、病院に入っても宿泊する部屋にたどり着くまで、フランス語で道を聞きながらも、相手の言ってることは全く分からず、指をさしている方向に進みながら何とか宿舎にたどり着きました。誰もが行ってから必ず思うのでしょうか、もう少しフランス語をマスターしておけばよかった。

Dr. Masqueletのもとで flap surgeryを学ぶ

宿舎のCochinから約1時間、パリ市内から少し外れたBobignyという町にあるHopital Avicenne（写真１）にtraumaおよびflap surgeryを中心に研修させていただきました。ここの地域は地下鉄の終点からトラムに乗っ

●（写真１）Hopital Avicenne

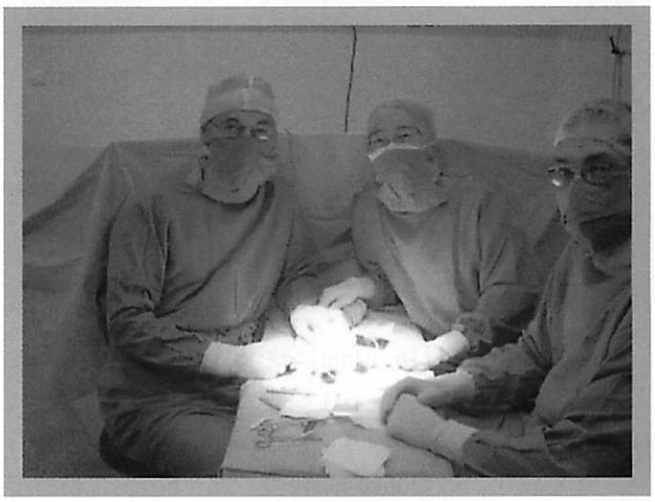
ていくのですが、とてもパリとは思えない、少し危険なにおいのする所で、外傷の程度もhigh energyなものが多かったように思います。

Dr. Masqueletは下腿骨骨折の感染性偽関節症例を含め多数のflap手術をされておられ、ヨーロッパから患者が集まってきていました。骨セメント、flap、BMPを含めた骨移植という3 stageの手術は感染の再燃もなくすばらしい治療法であり、今後の参考にしたい方法でありました。他の病院もそうですが、この病院は特に夜間の手術が多く、夜間の帰り道が危ない地域と言う理由もありましたが、何度か病院に泊まらせていただきました。

●（写真2）緊急手術/左はDr. Didier Hannouche

多くの有名手の外科医のいる Clinique du Square Jouvenet

この病院はプライベートの病院ですが、手の患者はヨーロッパ・アフリカ中から集まり（おそらくヨーロッパNo.1の手の外科病院）Gilbert先生、Tubiana先生、Le Viet先生（写真３）、Leclercq先生、Brunelli先生をはじめ14名の手の外科医が1日約40件、週約200件の手の手術をされておりました。失礼ではあったのですが、皮膚縫合を行う段階で隣の部屋に移り、次の手術を見せていただくようにさせてもらい、1日20件は見学させてもらいましたので、2週間という短い期間でしたが、なかなか有意義な研修をさせてもらいました。それぞれのoperatorが別のことをしており、CMのOAに対して3



●（写真3）左はDr. Le viet

●（写真4）パーティー

類ほどのtrapezectomy with ligament plastyがなされており、それぞれいい結果を残されているようでした。CTSはopen、one portal、two portalそれぞれやっており、手の外科の勉強をするのにこれほどいい病院はないと思われました。この病院のあるパリ16区は閑静な住宅街でパリの中では比較的安全な地域で、この病院の離れのような宿舎に住まわせてもらいましたが、各国から集まったresident達と楽しく過ごさせていただきました。

2人の有名手の外科医 Alnot先生、Oberlin先生のいる Hopital Bichat

●（写真5）Hopital Bichat

Hopital BichatではDr. Alnotは残念ながら引退まぢかでしたが、リウマチに関する手術をたくさんされており、Dr. Oberlinはご存知の通り、plexus surgeryを週2件くらいされており、例のulnar nerveの一部をbicepsに持っていくOerlin法を行った上位型麻痺も一度拝見させていただきました。

●（写真6）右はDr. Alnot

落ち着いていろんなものを見せてもらったHopital Larboisiere

友人のDr. Didier Hannoucheがいる病院であったため、いろんな融通を利かせてもらい、ここでは手の外科以外の疾患、救急、研究面での見学をさせてもらいました。

ナビゲーションシステムを使ったTKAや、hip surgeonのProf. Sedelの行うTHAを見学、救急医療や週1回は研究室に行き、カンファレンスに参加（プレゼンはみんな英語でしてくれた）、BMP、tissue engineering等の研究を見学させていただきました。この研究室には大阪市立大学の揚先生が研究留学されており、大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

●（写真7）Hopital Larboisiere

SOFCOT、GEM参加

この時期ちょうどフランス整形外科学会（SOFCOT）、フランス手の外科学会（GEM）にあたる学会が開催されており、分からなくてもいいかと、思

い切って参加しました。SOFCOTは友人のDidierが横で分からない単語を英訳してくれたりして、8割方理解できましたが、友人の参加しなかった、GEMの方はフランス滞在終盤と言うこともあり、フランス語の記載もだいぶ分かるようになり、presentationはなんとか理解できましたが、質問はほとんど理解できませんでした。

●（写真8）右はDr. Sedel

宿舎問題

以前から度々問題になっているようですが、フランスの宿舎状況は（特にパリはそうなんでしょうか）非常に難しい所があります。本来はフランスサイドが宿舎を用意することになっているようですが、私の場合は途中泊まるところがなくなり、大変苦労をしました。これはフランス側の先生が比較的hip、spineを専門にされている方に偏っていることにより、これら以外の研修をするときに特に問題が生じるのかもしれません。これもフランス……とは思っていますが、今後行かれる先生方の時にはスムーズにいって欲しいものであります。

まとめ

3カ月という短い期間ではありましたが、いずれの病院でも歓待していただき、また丁寧な英語で説明してもらい（本来はフランス語をマスターしておくべきですが）、大変有意義な研修を行うことが出来ました。せっかくフランスに来たのでパリ以外の都市にも行きたいとも思いましたが、移動の大変さ、希望の領域の病院がパリに集まっていることより、3カ月間すべてパリで過ごさせていただきました。さすが世界一の観光都市というだけあり、全く飽きることなく、帰国するときな名残惜しい気持ちでいっぱいでありました。

そして何よりもこの留学でよかったのは、自分自身がフランス人整形外科医に負けないよう、特に友人も含めた同年代のフランス人に負けないように、頑張らねばと刺激を受けたことかもしれません。

最後になりましたが、このようなすばらしい機会を与えていただいた日仏整形外科学会の皆様、留学中宿舎問題でぐったりしているときに、他学会で渡欧され、元気づけていただいた小野村先生、瀬本先生、藤原先生、ありがとうございました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。今後、日仏交換留学制度がますます実りのあるものに発展しますようにお祈りして、留学報告を終わらせていただきます。

Merci beaucoup

培われた技巧と、蓄積された臨床成績に触れることが、私の今回の研修における目的のひとつでした。

昭和大学藤が丘病院
柁 原 俊 久 先生

9月：Pitié-Salpêtrière病院にて

平成15年度日仏整形外科交換研修生としての私の研修は平成15年9月2日より、Pitié-Salpêtrière病院で始まりました。

Pitié-Salpêtrière病院はパリの東寄り、13区の5区との境目にあり、Gare d'Austerlitzの真ん前にパリ一番の広大な敷地を有する病院群です。その歴史はルイ13世の時代に遡り、病院の入り口には『設立1613年』と書かれてあり、かのCharcotが教鞭を執り、フロイトが学んだことでも有名で、今でも神経内科の分野では総本山的な意味合いを持つようです。新しいところでは、サッカー選手のロナウド、日本の横綱貴乃花が膝の手術を受けており、そしてPrincess Dianaが命を落とされたあの事故の際に搬送された病院でもあります。5月に青森で開催されたAFJOの際に来日されたCatonné教授のお招きもあり、最初の研修先としてこの病院を選びました。

Pitiéの一日は、朝7：45からのカンファレンスで始まります。主任教授こちらでいうところのChef de serviceであるSaillant教授、そしてCatonné教授、もう一人の教授資格者であるLazneck教授が一番前の列に座り、その前でInterneといわれる研修医たちがメモも見ずに前日の手術症例をよどみなくプレゼンしていきます。Saillant教授の「Bon, allez!」のかけ声にあわせて、次から次と症例が呈示されていきます。この合間にSaillant教授が病院での決定事項やパリ市内および各地で開かれる研修会等の紹介をされていました。

カンファレンスの後は8：30過ぎより手術が始まります。手術は4つの部屋に分かれて、脊椎・人工関節・足の外科・スポーツ、ほぼすべての分野の手術が行われていました。ただ、最初の2週間は手術予定のホワイトボードに書かれた略語が理解できず、スケジュールの把握に難渋しました。このうち人工股関節は、かのRobert Judet考案の牽引手術台を用いての仰臥位での前方進入法が用いられておりましたが、これをmini-incisionで行う要素を加味した方法が盛んに行われていました。インプラントに関しては、臼蓋側、大腿骨側ともにセメント、非セメントに限らず数種の機材が使われており、短期間の滞在においてその適応を理解するには至りませんでした。

●Pitié-Salpêtrière病院にて　Yves Catonné教授と

9月の2週目は、Dr. Emile Letournelの名前を冠した骨盤骨折のハンズオンセミナーがパリで開かれこれに参加し、且つ9月の4週目はGrenobleで開催された第7回日仏整形外科合同会議に参加したため、実際にPitiéのスタッフとともに過ごす期間は大変限られたものとなり、残念ながらCatonné教授がSOFJOで供覧された成人に対する大腿骨遠位の骨切り術を見せて頂ける機会はありませんでしたが、フランス整形外科への導入編として大変貴重な実りある日々を送らせて頂きました。Catonné教授の腰巾着のように教授の後をついて回り、外来、手術室、病棟を渡り歩きましたが、彼のその多忙さには舌を巻きました。毎日ひっきりなしにフランス内外を問わず来客があり、私が滞在したその短い期間においてもNice、Lyon、Grenoble、San Franciscoに赴き、テレビ取材が3回。こうした多忙のなかにあっても、患者さんを含め訪れるすべてのひとに常に穏やかにとても紳士的に接せられる姿は、やはり尊敬に値しました。

10月～11月：Cochin病院にて

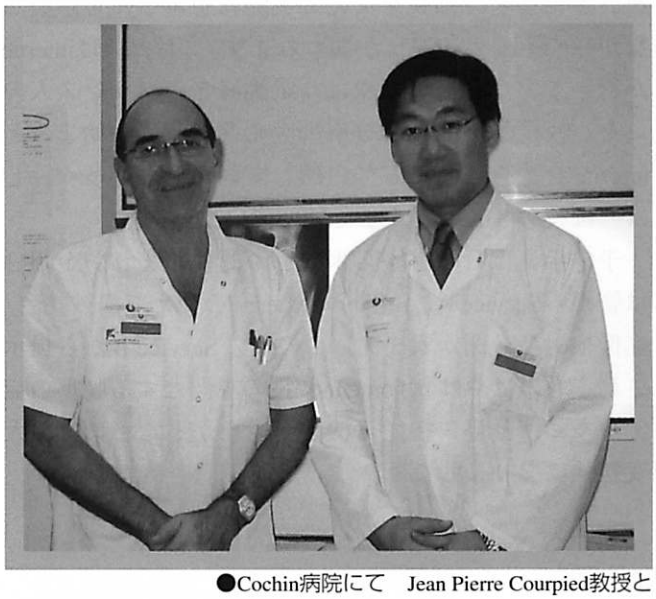
9月1日より、Cochin病院での研修が始まりました。Cochinにはこの交換研修プログラムにより訪れた方が多いと思いますが、以前日仏整形外科学会会長をされていたCourpied教授がChef de serviceを勤めるService Aと、腫瘍の大家であるTomeno教授率いるService Bの2つのunitからなり、私はCourpied教授のService Aで研修を行いました。A、Bあわせて年間800件近い人工関節を行っており、Le Point誌やLE FIGARO magazineのHospital of the yearなどの特集号では年間人工関節手術件数がフランスNo.1であることが毎年報じられています。

整形外科はPavillion OLLIER-MERLE D'AUBIGNEと称される独立した6階建ての建物のなかにあり、sous-sol（地階）に外来、rez-de-chaussee（日本で言う1階）に救命救急、1階に手術室、2階から4階までが整形外科病棟、5階が熱傷専門センターとなっており、Courpied教授のご配慮により9月から11月までの3ヶ月間、5階の熱傷センターの並びにある整形外科の当直室のような部屋を使わせて頂きました。

Cochin service Aの一日もやはり朝7：45からのカンファレンスで始まります。前日の手術症例がinterneにより供覧されたあと、併設されている救急外来から緊急入院になった外傷例が医師と一緒に当直の実習をしたexterneと呼ばれる医学生により供覧されます。当直は教授以外のstuff doctor、interne、externeの3人体制で行われており、もちろん整形専属の麻酔科医も当直しており、骨折などはなるべくその日か次の日のうちに手術をしてしまうシステムになっているようです。Externeたちのプレゼンは、お世辞にも“淀みなく”とはいかないレベルでしたが、まだまだ顔に幼さの残るmonsieur、mademoiselle達が寝癖のついた頭を気にもせず教授にひとつひとつ報告する姿には、昨夜の苦労が忍ばれ好感がもてました。

カンファレンスが終わり、しばしのコーヒータイムのあと、手術は8：30より始まります。5台の手術台をService A、B効率よく分け合い、おのおのの手術台で一日4～5件の手術が組まれています。骨髄炎や人工関節後の感染例には感染例専用の手術室があり、病棟も非感染患者とは接触のない専用の病棟へ運ばれます。感染者と非感染者の居住空間は完全に峻別されており、施設の充実ぶりにはうらやましさを覚えました。

私はCourpied教授、Mathieu教授のprimary THA、TKA、revision THA、TKAを主に見させて頂きました。Courpied教授の手術で私が最初に入れて頂いた症例は、Shanz osteotomy後の高位脱臼例でした。この症例をinterneと私を相手に、引き下ろし・骨切りを加えて3時間ほどで終わらせたときには、その無駄の無いメスさ



●Cochin病院にて　Jean Pierre Courpied教授と

ばきに感嘆しました。このほかにもDr. Vastel、Dr. Kinderman、Dr. Hamadouche、Dr. Luc Kerboullなど、多くの先生の手術に入れて頂きました。Cochinではご存じのとおり、original Charnleyに若干の変更を加えたCharnley-Kerboull型を1970年代から使用し、大幅な変更なく現在に至ってます。この長年培われた技巧と、蓄積された長期の臨床成績に触れることが、私の今回の研修における目的のひとつでした。両教授は言うに及ばず、スタッフの先生方においても多少のmodifyはあるものの、ほぼ同じ手技で手術を勧めていく姿には、歴史ある病院においてしっかりと技の伝承がなされていく姿を見せて頂いた気がします。毎年11月は1年間勤めたinterneとchef de cliniqueの交代の時期です。そのため10月の末には巣立っていくinterneに対し「Cochinのやりかたを忘れるな。」と言うがごとく、Mathieu教授が手術毎に何度も何度も繰り返し手技の要点を語っている姿には感銘をうけました。

毎週月曜日は、主にCourpied教授の外来を見学しました。股関節疾患では骨頭壊死、軽度の形成不全のものから、両側の高位脱臼、両側のankylose、多数回revision例など、もし日本で私の外来に来られたら頭を抱えてしまうような症例が、なんのよどみもなく次々と手術予定に組み込まれていきます。日に5～6件、多いときには週に20件以上のTHAをこなしている状態をもってしても手術予定はほぼ半年待ち。その症例数の多さはなんともうらやましいかぎりです。

毎週月曜日と水曜日の夕方5：30から、整形専属麻酔医、手術室看護師長を交えて実際に患者さんを診察しながらの術前カンファが開かれます。プレゼンはinterneが行いますが、そこはやはり議論好きのフランス人のこと。教授とstuffおよび麻酔医の間で激論が始まるとinterneを置き去りにして白熱していくことも多く、しばしば夜の8：00近くまで続いていました。

予定手術は月曜日から木曜日の間に組まれ、金曜日は朝からService A、B合同でexterneを交えての抄読会・症例検討会が開かれます。この際にService Bから提示されるものはやはりTomeno教授の専門とする腫瘍の症例が多く、腫瘍に接する機会が少なかった私には、大変勉強になりました。

おわりに

大橋先生よりメールにて、本学会の交換研修帰朝報告の依頼を頂き、改めて今フランスにおける自分の存在を認識しパソコンに向かいました。40歳上限という年齢制限ぎりぎりにして採用して頂いた交換研修のチャンスであり、且つこの年齢からも今後改めて海外に留学することは極めて困難と考え、私はこの交換研修を足がかりに1年間の在仏を決意し大学に申請しました。

3ヶ月の期間限定で“滞在”する客人に比べ、半年以上“居住”する人間に対し、フランスはある種厳しい顔を見せます。各種手続きは煩雑を極め、担当者の気分に振り回されているのではないかと思われることしばしば。しかし、それらのハードルのすべてを、私は数少ないフランス人の友人の助言とお手伝いによりクリアーし、1年間の滞在許可証を獲得しました。

私は今、弓削大四郎先生からご紹介頂いた16区にあるClinique JouvenetでDr. Henri Judetのもと、Judet学派の手術を研修させて頂いております。その後は昨年の日整会の際に来日されたChristian Mazel教授の御指導のもと、14区にあるInstitute Mutualiste Montsourisでの約半年間の研修を予定しています

このような貴重な機会を与えてくださった日仏整形外科学会関係各位の先生方に深くお礼を申し上げるとともに、後に続かれる先生方に対し何かしらのお手伝いができればと、こころから思っております。

日仏整形外科学会について

その真価を発揮してもらいたい

七川　歓次

副会長の菅野先生が亡くなられたこともあって、長年務めてきた会長を退かせてもらった。それに本学会も有難いことに、各方面からのご支援を戴いて順調に育ってきているが、新しい会長の下で一層の成長を期する時期に来ているのではないかと思ったからである。今回、本誌の編集者の方から“これからの日仏整形外科学会”について何か書いてほしいといことであったので、好きなように書かせてもらうことにした。意にそぐわないところはご容赦願いたい。

日仏双方とも運営の責任者に素晴らしい人達がいた

最初菅野、小林両氏から日仏整形外科学会をつくる話を聞いた時は、趣味の日仏整形外科クラブくらいの軽い気持ちであった。既に日独整形外科学会があり、私の後輩の上野良三教授（当時）が専らその運営にあたっていて、彼からよく話を聞いていたので、日仏整形外科学会も同じようなものだろうと思っていた。ところが、日仏整形の方は思いの外発展し、今年で16年目になるが、尚勢いが持続しているように見えるのはどういう訳であろうか？

おそらくその理由は、日仏双方とも運営の責任者に素晴らしい人達がいたからではないかと思っている。このような昔話を長くするのは本意ではないので、これにとどめ、名前だけあげさせてもらうと、日本側では、菅野、小野村、小林、瀬本、フランス側ではリヨンのPicault教授、パリーのCourpied教授の各氏で、こういうこともあってPicault教授は一昨年日本整形外科学会の名誉会員に選ばれている。

ここでもう一人日仏整形外科学会会員の名前をあげたい。それは森崎直木先生で、亡くなられたが私どもの先輩にあたり、フランスの整形外科を良く理解し、愛し、ひろく紹介された方である。大学をやめてから高齢になって、仏日整形外科学用語集（文光堂）を1989年に、第2版を1991年に出版された。素晴らしい人であるが、むしろ物凄い人であったと思っている。

すぐれた先達に接する機会を作り、人材を育ててほしい

さて、これからの日仏整形外科学会についてまず言いたいことは、人材を育てるということではないかと思う。どんな組織を作り、会則を工夫し、up dateなものを取り入れても、人材がいなければ長くは続かない。人材をつくる最も早い方法は、利根川進氏も言っていたように、若い人がすぐれた先達に接する機会を作るということである。利根川氏は研究者の話で、“すぐれた人”とは一流の、ノーベル賞をもらえるような人のことをいっていると思われるが、臨床の場では知名度はそれ程でなくても、身近に多くのすぐれた人がいると思う。ただその人達がうまく評価されなければならない。この観点から、日仏整形外科学会（SOFJO）に毎年フランスから講師を招待し、２年毎に日仏で相互に場所をかえて学会（AFJO）を開催し、また日本の若い整形外科医が交換研修医としてフランスの大学に留学する制度があるのは極めて有意義なもので、これからも力を入れて色々工夫してやってほしい。交換研修医は滞在期間が短いので、印象が上滑りにならないかと思ったが、帰朝報告を聞いていると、随分充実していて、びっくりさせられる。そこは本人の力量によるもので、あまり心配することはないかもしれない。

日仏の共同研究も企画してやってほしいと思う。コシャン病院のCourpied教授に頼んで、井上康二先生（現大阪リハビリテーション病院副院長）にcoxarthrosisの共同研究をしてもらったが、随分良い成績が出て喜んでいる。これはかなりやりにくい面もあるので、ここでも人材を見つけなければならない。

医療の現場では感性を磨くことが求められる

サイエンスに国境はないといわれるが、臨床医学には、芸術的なところがあり、伝統や地域性が多分にあって、フランス医学とかドイツ医学とかいわれる所以で

ある。テクニックがすべてを解決するのだと決心する向きもあり、それを生活信条としている人達もいるが、それにはアメリカ人のような底抜けの楽天主義が必要だろう。人間を全体としてあつかわなければならない医療の現場では、何よりも感性を磨くことが求められる。フランス人に接してその感性から学ぶところも多いと思う。

私がいたパリーのコシャン病院で印象的であったのは、症例を一例一例大切にしてそこから学ぼうとしていることであった。当時基礎医学の研究に興味をもっていたので、患者を診たり、手術することばかりに熱中しているフランス人に物足りなさを感じていた。その上コシャン病院で働いた同僚のフランス人医師達が、日本人の方がよく研究するから日本の医学の体制の方がよいと思うとフランス流におだてられると、尚更そのような気になっていた。しかしいつのまにかフランス色に染まってしまい、滋賀医大で、若い人が、大へん面白い症例ですが１例ぐらいでは……と言うと、“１例こそ大切で、たくさん集めて、統計をとるのがいいと思うのは大まちがいだ”と文句を言ったが、納得してくれているようには見えなかった。

最近tailor-made medicineということで、遺伝子研究の進歩もあって、患者個々に合った治療法を工夫するようにいわれているが、要するに症例毎に神経を使う、フランス医学の伝統そのものである。ついでに言えば、エビデンスは利用するものであって、エビデンスのために臨床研修しても大した進歩はないだろう。

国際会議でイギリス人やオランダ人、北欧の医師達にまじってフランスの医師は、人にもよると思うが、より個性的に見える。近頃若い人達に個性的になれと言う人がいるが、頭で考えて個性的にはなれないし、なっても変人あつかいされるとすぐに元通りになるだろう。しかし、日本人はどうみても、同じように考えて、同じように行動し勝ちで、“和をもって尊しとする”ことに異論はないし、資源に乏しい狭い国土で、大勢が暮らすための知恵であることには間違いないが、研究とか芸術では、個性的でないと新しいものを生みだしにくいし、医療でも患者それぞれに見合った個別的な治療に思いが及ばないだろう。こういうことで、我々はフランス人から、フランスの医学から学んだり刺激されたりすることが多いのではないか。

先日、本屋で“金がなくても陽気なフランス人、金があっても不安な日本人”というタイトル（まちがっているかもしれない）の本を見た。日本人がものごとを非観的に見るのが好きなことはよく知られている。堺屋太一さんが口ぐせのように“外国人が来て住んでみたくなるような国になれ”というのも同じことを言いたいのであろう。大分前だが、日本へ招かれてきた昔からのパリーの友人が、日本は衛生的で、人々は行儀正しく、安全で、立派な国であると感嘆するように言ってくれたが、私が訊ねたわけでもないのに、側にいた夫人が“私もそう思うが、住んでみたいとは思わない”と言っていた。現在、人々のマナーが悪くなり、治安は悪化したが、非観的な考え方だけは未だに健在で、我が国に取柄はなくなったのではないかとおもったが、こういう風に考えることこそいかにも日本的であるというものであろう。

私はこういう面でも、日仏整形外科学会が、その真価をいかんなく発揮してもらいたいと思っているがどうであろうか。

日本側・フランス側役員を紹介します

日本側役員		フランス側役員	
名誉会長	七川　歓次	Président	Philippe MERLOZ
会　長	小野村敏信	Vice Président	Dominique GAZIELLY
副会長	小林　　晶	Affaires générales	Jean Pierre COURPIED
書記長	瀬本　喜啓	Secrétaire Général	Olivier RAY
書　記	大橋　弘嗣	Trésorier	Philippe WICART
	弓削　　至	Secrétaire Adjoint	DURANDEAU
	青木　　清	Members du bureau	Charles PICAULT
	藤原　憲太		Jacques CATON
日本側公式連絡員	ジラン敬子		

どうぞご遠慮無くご連絡ください

●ジラン敬子（Japon Service Europe代表）

日仏整形外科学合同会議（AFJO）が1990年に設立された最初の時から学会のお手伝いをさせて戴き始めてから日仏整形の先生方とのお付き合いも早や14年の月日が経ちました。
発足以来学会時の準備や連絡そして研修生の先生方のサポートなど現在まではフランス側事務局内で活動して参りましたが、昨年グルノーブルでの第七回AFJO会議終了時点から新規に日仏整形外科学合同会議の日本側事務局付きフランス連絡係として皆さんのお手伝いをさせて戴けるようになりました。

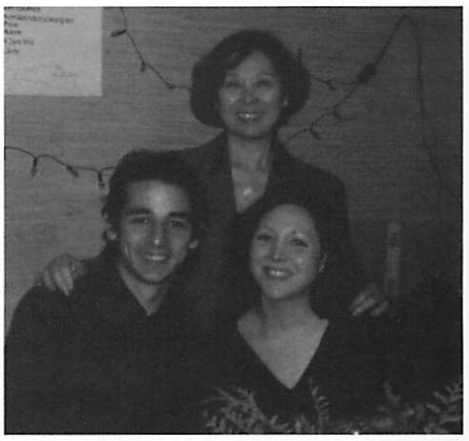
七川前会長を始め小野村現会長と諸役員の先生方には何時も大変ご懇意にして頂き心から感謝致しております。フランス生活30年のなかで日仏整形の先生方との数々の出会いは口では言い表わすことの出来ない程私にとって実り豊かな体験となり日仏の友好を結ぶ機会となっております。恵まれた両国の架け橋になれるこの様な機会は誰でも得られるものでは無く、今後とも皆様のご支援の元にフランスでの日仏整形外科学合同会議（AFJO）日本事務局の一員として頑張っていきたいと思いますのでよろしくご高配下さるようお願い致します。

故　菅野先生を偲んでの追悼文を拝見しながら1998年のリヨンでの第五回AFJOにアメリカ在住のお嬢様もジョイントされ、遠くに居られるお嬢様を心配されながらも優しいお父様としてリヨンの一時をご一緒されていた先生のお幸せそうなお姿を思い出しております。先生がカトリック信者であられたことは追悼記事を読み初めて知ったことです。今先生が居られたらきっと喜んで下さっただろうと残念に思うのは、私自身カトリックで現在リヨンのフルヴィエール寺院の聖歌隊で歌っており、また今年7月にリヨン・イエズス会所属の子供合唱団を引き連れて日本演奏旅行に行くことになっているからです。東京は7月4日にイグナチオのカテドラルでミサに参加しコンサートを致します。東京／横浜／長野／広島／笠岡／京都での演奏会も京都はミサと教会でのコンサートで締め括ることになって下ります。

この時のミサで菅野先生のご冥福をあらためてお祈りさせて戴きます。

整形外科を通じ又音楽を通し日仏交流をこれからも続けて参りますので先生方もどうぞご遠慮無くご連絡戴ければ嬉しく思います。

Keiko GIRIN **CTC-AFJO en FRANCE
e-meil : lyonjse.keiko@wanadoo.fr
Tel/Fax(Direct) : 0033-(0)4 78 60 00 96



●ロンドンにいる末娘パスカルと彼女の主人とともに

あなたも

フランス研修に！

日仏整形外科学会では、フランス整形外科学会（SOFCOT）との間で青年整形外科医の交換研修を行っております。来年度の研修条件、応募条件等は下記のとおりですのでお申し込み下さい。

本交換研修プログラムの趣旨は、フランスとのコネクションを持たない青年医師に留学先を紹介し、渡航費用と滞在費の一部を援助するというものです。したがって、一度フランス留学を経験しておられる先生は応募を御遠慮下さい。

募　集　要　項

1）募集人員

若干名（平成17年度）

2）研修条件

1．滞在期間は3か月間を原則とする。
この間はヴィザが不要であるが、これを越して滞在する場合の延長に関するすべての手続き（語学学校入学手続きやヴィザ発給のための受け入れ承諾書の依頼等）は自分ですること。1か月単位であれば複数の施設での研修も可能である。

2．フランスでの滞在施設は、希望する研修分野等に応じてフランス側の担当委員が最も適当と思われる施設を推薦する。ただし応募者が特定施設を希望するときは申し出ることができる。
研修期間中の家族の同伴は原則として認められない。
（注意：本制度は大学の若手医師アンテルヌが病院に寝とまりしている部屋に泊まることを原則としている。滞在費用を自己負担する場合はこの限りではないが、家族への宿舎斡旋等に関して過去にさまざまなトラブルがあったため、学会として援助や斡旋は一切行わない。特にパリにおいてはアパートの契約等に関してのトラブルが多く、貴重な滞在期間の多くを宿舎探しに費やすこともあるので、フランスに知人等がいない場合は単身のほうが望ましい。）

3．費用について　a）渡航費用の一部を日仏整形外科学会が援助する。
b）フランス滞在中の本人の宿泊費はフランス側が負担する。
ただし家族を同伴する場合は、宿泊費や食費等のすべての滞在費は自己負担とする。
c）食費およびフランス国内での移動の費用は原則として応募者の負担とする。

4．帰国後、仏語（英語でも可）と日本語での報告書の提出ならびに本会の総会での帰朝報告を行う。

5．本年度の研修開始時期は4月以降とする。

3）応募条件

1．応募者は日仏整形外科学会会員であること。
2．応募者は日本整形外科学会認定医であること。
3．原則として40才を応募年令の上限とする。
4．勤務している病院または施設の責任者の承諾のあるもの。
5．フランス語または英語を話すもの。

4）応募に必要な書類

1．日仏整形外科学会交換研修申請書
2．履歴書（大学卒業以降とする）
3．日仏整形外科学会会員2名の推薦状――推薦者は身元保証人に準ずる者と考えること。
4．業績目録――主な発表論文5編以内（論文の別刷りは不要）
5．渡仏承諾書　a）大学の医局勤務者・・・・・教授の承諾書
b）病院または施設勤務者・・・勤務している病院または施設の責任者の承諾書
（大学の医局人事により出張中の者は、教授の承諾書も要す。）

以上1．以外の書式は自由であるが、すべてA4サイズに統一し、上記の順にならべて左上をホチキスで綴じること。また、コピー7部を同封すること。

6．連絡用住所シール（5枚）・・・・・希望する連絡場所を記入して上記の書類とともに返送すること。

5）選考方法

1．第1次審査は書類選考とする。書類審査の結果は平成16年7月上旬に個別に連絡する。
2．書類選考に合格したものには平成16年7月31日（土曜日）に事務局において面接を行う予定である。
面接の時間は個別に通知する。
3．合否は平成16年8月上旬に通知する。
4．合格者は後日改めて仏文または英文の履歴書等、フランスでの研修に必要な書類が求められる。

6）申請締め切り

平成16年6月30日必着

7）申し込み先

日仏整形外科学会事務局　　大阪医科大学整形外科内
〒569-8686 大阪府高槻市大学町2-7　電話（072）683-1221 代表（お問い合わせは瀬本まで）

日仏整形外科学会　　会長　小野村　敏信

日仏整形外科学会交換研修申請書

様式2

H17-1

申請者氏名 ＿＿＿＿＿＿＿＿ 性別＿＿＿＿ 年齢＿＿＿歳

仏　　文　　姓 ＿＿＿＿＿＿＿＿ 名 ＿＿＿＿＿＿＿＿

生年月日 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

住　　所　〒＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

電話番号 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

勤務先名 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

勤務先住所　〒＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

勤務先電話番号 ＿＿＿＿＿＿＿＿ FAX ＿＿＿＿＿＿＿＿

研修を希望する専門領域 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

研修を希望するフランス側の機関（病院）があればお書き下さい。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

希望する滞在期間　平成17年＿＿月＿＿日から平成＿＿年＿＿月＿＿日

（本年度は4月以降から研修開始とする）

会話可能な外国語（○印をつける）

＊フランス語　＊英語　＊その他（　　）

家族について（○印をつける）

＊同伴する　　＊同伴しない

配偶者も医療関係者の方はその職種を書いてください

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

過去に本学会の交換研修に応募歴がある方は、何年に面接を受けたかお書き下さい。

平成＿＿＿年

上記の如く日仏整形外科学会交換研修を希望し応募いたします。

平成　　年　　月　　日

氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿印

第11回日仏整形外科学会(SFJO)開催のお知らせ

第11回日仏整形外科学会を下記の要領で開催し、一般演題を募集いたします。特別講演として、今回はマルセイユ大学のボリニ教授に先天性脊椎変形の外科的治療に関して御講演頂きます。是非御参加下さいますよう御願いします。

記

[1] 日時：2004年11月6日（土）午後4時から7時

[2] 場所：神戸国際会議場
INTERNATIONAL CONFERENCE CENTER KOBE
〒650-0046 神戸市中央区港島中町6-9-1
TEL：078-302-5200　FAX：078-302-6485
（第103回中部整形災害外科学会の会場と隣接）

[3] 特別講演：「先天性脊椎変形の外科的治療」
Prof. G. BOLLINI先生（Marseille大学教授）
（日本整形外科学会教育研修講演　1単位申請中）

演題応募方法：演題名、演者名、所属をそれぞれ日本語と英語で記載し、日本語で連絡先住所、電話番号を明記の上、下記事務局までE-mailでお知らせください。なお演題の採否は会長にご一任下さい。発表は英語でお願いします。

演題応募締切：平成16年9月6日（月）正午

使用言語：日本語、英語

学会参加費：三千円

学会終了後、懇親会を予定しております。

会長　小野村　敏信
事務局　大阪医科大学整形外科学教室
〒569-8686 大阪府高槻市大学町2-7
電話 072-683-1221代表（内線）2364
E-mail：ort003@poh.osaka-med.ac.jp

第8回日仏整形外科合同会議(8éme Rèunion de 1'AFJO)開催のご案内

2005年5月6（金）・7（土）日の両日、第８回日仏整形外科合同会議を下記のように開催いたします。演題応募方法などは決まり次第お知らせします。多数の先生方の演題応募、ご参加をお待ちしています。

記

[1] 会議期日：2005年5月6日（金）～7日（土）

[2] 開催場所：京都市国際交流会館

[3] 議　　長：瀬　本　喜　啓（大阪医科大学整形外科助教授）

[4] 会議内容：2005年　5月6日（金）：開会式・特別講演2題
5月7日（土）：一般演題・閉会式・懇親会
5月8日（日）：excursion（奈良を予定）

[5] 使用言語：英語

[6] 予定プログラム

		イベントホール	研修室	第1・2会議室	第3・4会議室	和風別館	特別会議室
5月6日(金)	午前	開会式 特別講演1 一般演題	機械展示 ドリンクコーナー	学会本部・来賓室	講師PC受付・打合せ室	同伴者プログラム お茶・お華会（6日）	休憩室
	午後	特別講演2 一般演題					昼　食
	夕方						懇親会
5月7日(土)	午前	シンポジウム 「日仏両国における最少侵襲手術の現況」 一般演題					休憩室
	午後	閉会式					昼　食

第8回日仏整形外科合同会議

議長　兼　実行委員長　　瀬本　喜啓（大阪医科大学整形外科助教授）
組織委員長　兼　募金委員長　　小野村敏信（大阪医科大学名誉教授）

1

日仏整形外科学会ボランティアグループ

「パピヨン」

に入会しませんか

———Equipe bénévole pour la SOFJO（AFJO）———

日仏整形外科学会の活動を支えていただくために1996年4月に結成されました。

まず1996年4月13日・14日に東京で開催された第4回日仏整形外科合同会議のお手伝いをするために10数名の先生や関係の方々に登録していただき、会議の開催に協力していただきました。
今後も日仏整形外科学会の運営をお手伝いしていただける先生ならびに一般の方々にボランティアとしてご登録いただき、可能な時間にお手伝いをお願いしたいと思っております。
日仏整形外科学会の会員または会員1名の推薦を受けた方なら誰でも入会できます。
日常的な簡単な英会話ができれば、フランス語は必ずしも必要ではありません。もちろんフランス語のできる方は大歓迎です。シンボルマークは蝶のマークです。

Papillonに関するお問い合わせ、入会申込は日仏整形外科学会事務局、瀬本喜啓まで。

2

インターネットホームページのご紹介

Société Franco-Japonaise d'Orthopédie

Welcome to So.F.J.O Homepage
ようこそ日仏整形外科学会（SOFJO）のホームページへ

日仏整形外科学会のインターネットホームページのアドレスは

http://www.sofjo.gr.jp/

です。

What's New／新着情報では第11回日仏整形外科学会のお知らせ、平成17年度交換研修プログラムの案内や第7回日仏整形外科合同会議（AFJO）の内容などが掲載されています。
是非のぞいてみてください。

- 沿革
- 活動内容
  入会のご案内
- 役員紹介
- 共同研究
- 交換研修
- 日仏整形外科協議会（AFJO）
- 日仏整形外科学会ボランティアグループ
- 関連リンク集
- SOFJOのTop Pageへ

3

日仏整形外科学会 会計報告・予算をお知らせします

平成14年度会計報告

歳入の部	（単位：円）
一般会員年会費（170人）	510,000
賛助会員	1,300,000
寄付（坂巻豊教先生）	100,000
広告料	1,282,500
預金利息	41
雑収入	0
前年度繰越金	3,216,278
計	6,408,819

歳出の部	（単位：円）
日本人交換整形外科医奨学金	724,000
フランス人交換整形外科医奨学金	0
SOFJO／AFJO開催関係費	300,000
日仏整形外科学会関連事業（表彰など）	0
日仏共同研究、研究助成	0
森崎仏日整形外科学用語集編纂事業	0
インターネットホームページ維持管理費	354,180
コンピューター関連費	351,036
日仏整形外科学会事務局費	650,336
通信費	108,600
事務費	121,696
人件費	420,040
会議費	13,453
旅費・交通費	147,242
印刷費	10,360
雑費（菅野先生供花・ピコー先生祝い）	255,202
出金小計	2,805,809
次年度繰越金	3,603,010
計	6,408,819

平成15年度事業費予算編成

歳入の部	（単位：円）
一般会員年会費	500,000
賛助会員	1,000,000
広告料	700,000
預金利息	40
雑収入	5,000
前年度繰越金	3,835,970
計	6,041,010

歳出の部	（単位：円）
日本人交換整形外科医奨学金	
渡航費＋滞在費（一部）200,000×2人	400,000
フランス人交換整形外科医奨学金	
滞在費、交通費　100,000×2人×2カ月	400,000
SOFJO／AFJO開催関係費	300,000
日仏整形外科学会関連事業（表彰など）	50,000
日仏共同研究、研究助成	300,000
森崎仏日整形外科学用語集編纂事業	50,000
インターネットホームページ維持管理費	400,000
コンピューター関連費	300,000
事務局（通信費、事務費、人件費）	700,000
会議費	50,000
旅費・交通費	200,000
印刷費	800,000
予備費	100,000
次年度繰越金	1,991,010
計	6,041,010

4 これまでに交換研修に参加された先生方

研修年度	氏名	所属医局
1990	稲毛　昭彦	大阪医科大学
1991	三輪　　隆	帝京大学
1991	末松　典明	旭川医科大学
1992	星　　忠行	弘前大学
1992	村上　元庸	滋賀医科大学
1992	久保　俊一	京都府立医科大学
1993	小浦　　宏	岡山大学
1994	西川　真史	弘前大学
1994	岩崎　幹季	大阪大学
1995	石澤　命仁	滋賀医科大学
1995	安永　裕司	広島大学
1996	安間　基雄	順天堂大学
1996	寺門　　淳	千葉大学
1996	仁平高太郎	慶応大学
1997	益田　和明	岐阜大学
1997	金子　和生	山口大学
1998	山川　　徹	三重大学
1998	岡本　雅雄	大阪医科大学
1999	清重　佳郎	山形医科大学
1999	川崎　　拓	滋賀医科大学
2000	宮本　　敬	岐阜大学
2000	藤井　一晃	弘前大学
2000	細野　　昇	大阪大学
2001	鳥飼　英久	千葉大学
2001	久我　尚之	九州大学
2002	瀧川　直秀	大阪医科大学
2002	松峯　昭彦	三重大学
2003	杙原　俊久	昭和大学藤ヶ丘病院
2003	矢吹　有里	慶応義塾大学
2003	杙原　俊久	昭和大学藤が丘病院

5 これまでにフランスから交換研修医として来られた先生方と研修施設

研修年度	氏名	研修病院名
1991	Philippe LEVEREAUX	京都府立医科大学・広島大学
1991	Luis Michel COLLET	大阪医科大学・滋賀小児センター・福岡こども病院
1992	Frederic DUBRANA	福岡整形外科病院・九州大学
1992	Marc CHASSARD	慶応義塾大学・東海大学・札幌医科大学
1994	Philippe WICART	山口大学・金沢大学
1994	Philippe RENAUX	滋賀医科大学・岡山大学
1995	Michel NINOU	大阪医科大学・新潟手の外科研究所・広島大学
1997	Bernardo Vargas BARRETO	国立小児病院・岡山大学・国立大阪病院
1997	Sylvie MERCIER	大阪医科大学
1998	Jérôme COTTALORDA	大阪医科大学・福岡県立粕屋新光園
1999	Olivier CHARROIS	滋賀医科大学・京都市立病院
1999	Eric HAVET	滋賀医科大学
2001	Laurent JACQUOT	慶応義塾大学・高岡整志会病院
2001	Alexandre ROCHWERGER	大阪医科大学・山形大学

編集後記

2003年9月にフランスのグルノーブルで第7回日仏整形外科合同会議(AFJO)がMerloz会長のもとで開催されました。

学会の報告はもちろんのこと、グルメの街リヨンでの夕食が忘れられず、思わず瀬本先生と協力してグルメ報告まで書いてしまいました。この会を機に日仏整形外科学会の日本側役員が交代いたしました。当初から会長として本学会の発展に努めてくださいました七川先生には心からお礼申し上げます。

交換研修帰朝報告は2名の先生からいただきました。また、柁原先生はこれからもうしばらく留学生活を続けられるのですが、途中報告として文章をいただきました。文章からは苦労された様子も伝わってきますが、それを乗り越えてこそ思い出もひとしおということになるのでしょう。交換研修の募集に関しては、次年度から食事は応募者の負担となりました。

本年は11月に神戸で第11回日仏整形外科学会(SOFJO)が開催されます。中部日本整形外科災害外科学会に引き続いて行われます。フランスから1名の先生をお迎えして特別講演も予定されています。多くの先生方の参加をお待ちしています。

国際情勢は緊張した状態が続いており、国間の交流はますます重要な意味を持つようになってきていると思います。本学会も整形外科の分野ですが、日本とフランスの交流の橋渡しであり続けたいと思っています。

(係　大橋弘嗣)

フランス整形外科医交換研修受け入れ承諾書

様式１

（日仏整形外科学会　交換研修プログラムによる）

フランス青年整形外科医を対象とした、交換研修プログラムの日本側受け入れを以下の条件のもとで承諾します。（すでに登録されている施設は、変更事項のある場合のみお送りください。

受け入れ責任者 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

受け入れ施設名 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

住　　所 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

電話番号 （　　）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

専門分野 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

受け入れ条件（該当する項目の□内にチェックして下さい）

＊受け入れ可能な期間（原則としては３ヵ月間です）

□3ヵ月間　□2ヵ月間　□2ヵ月間　□何ヵ月でもよい　□その他（　　）

＊受け入れ可能な時期

□　月から　月まで　□　月を除く　□常時受け入れる

□その他（具体的に　　）

＊受け入れ可能な人数

□年間１人　□年間２人　□年間３人以上　□その他（　　）

□同一時期に１人　□同一時期に２人以内　□同一時期に３人以上

□その他（　　）

＊宿泊設備について

□宿泊設備を無料で利用可能

□宿泊設備を有料で利用可能（1日　　円）

□宿泊設備は備えていないがホテル等の宿泊費は支給する

□宿泊設備は備えていない。ホテル等の宿泊費も支給しない

□その他（　　）

＊食事について

□施設内で食事を用意する

□施設内で食事の準備はしないが食費を支給する

□一部施設内で食事を用意し、一部食費を支給する

□その他（　　）

＊交通費について

□交通費を支給する

□交通費は支給しない

□その他（　　）

＊その他

□日本国内の学会等への参加を援助する

□その他（　　）

以上の条件のもとに日仏整形外科学会の青年整形外科医の日仏交換プログラムの日本側受け入れ機関となることを承諾します。

平成　　年　　月　　日

受入責任者　氏名　　印

AIR FRANCE
あなたの最高の空へ。エールフランス
SKYTEAM

パリへとそよぐ風、
東京から週18便
大阪から週10便
www.airfrance.co.jp

特　性

1 骨の脆弱性の要因となる骨基質タンパク質オステオカルシンの異常を正常化します。

2 骨形成を促進し低下した骨代謝状態を改善します。

3 骨の微細構造を改善します。

4 骨粗鬆症における骨塩量及び疼痛の改善効果が確認されています。

5 骨形成促進作用（ラット, *in vitro*）と骨吸収抑制作用（*in vitro*）の両面から骨組織の代謝不均衡を改善します。

6 副作用発現率は4,252例中145例（3.41%）でした。
主な副作用は、胃部不快感37件（0.87%）、腹痛17件（0.40%）、発疹、瘙痒（症）、BUN上昇がそれぞれ10件（0.24%）等でした。（第5回安全性定期報告書より）

本剤はビタミンK2製剤であり、抗凝血薬療法で用いられるワルファリンカリウム（ワーファリン）の作用を減弱します。これに基づき、使用上の注意に「禁忌」と「相互作用」が設定されています。

【禁忌】（次の患者には投与しないこと）
ワルファリンカリウム投与中の患者〔「相互作用」の項参照〕

【効能・効果】
骨粗鬆症における骨量・疼痛の改善

【用法・用量】
通常、成人にはメナテトレノンとして1日45mgを3回に分けて食後に経口投与する。

【使用上の注意】

1.重要な基本的注意
(1) 本剤の適用にあたっては、厚生省「老人性骨粗鬆症の予防及び治療法に関する総合的研究班」の診断基準（骨量減少の有無、骨折の有無、腰背痛の有無などの総合による）等を参考に、骨粗鬆症との診断が確立し、骨量減少・疼痛がみられる患者を対象とすること。
(2) 発疹、発赤、瘙痒等があらわれた場合には投与を中止すること。

2.相互作用
併用禁忌（併用しないこと）

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
ワルファリンカリウム（ワーファリン）	ワルファリンの期待薬効が減弱する可能性がある。患者がワルファリン療法を必要とする場合はワルファリン療法を優先し、本剤の投与を中止する。プロトロンビン時間、トロンボテストなど血液凝固能検査を実施し、ワルファリンが維持量に達するまで定期的にモニタリングを行う。	ワルファリンは肝細胞内のビタミンK代謝サイクルを阻害し、凝固能のない血液凝固因子を産生することにより抗凝固作用、血栓形成の予防作用を示す製剤である。本剤はビタミンK2製剤であるため、ワルファリンと併用するとワルファリンの作用を減弱する。

3.副作用
総症例1885例中、81例（4.30%）の副作用が報告されている。（承認時及び市販後第1回使用成績調査の累計）

	0.1～5%未満	0.1%未満	頻度不明
消化器	胃部不快感、腹痛、悪心、下痢、消化不良	口渇、食欲不振	嘔吐、口内炎
過敏症	発疹、瘙痒、発赤		
精神神経系	頭痛	ふらつき	めまい
肝臓	AST(GOT)、ALT(GPT)、γ-GTPの上昇等		
腎臓	BUNの上昇等		
その他	浮腫		

4.高齢者への投与
高齢者に長期にわたって投与されることが多い薬剤なので、投与中は患者の状態を十分に観察すること。

5.妊婦・産婦・授乳婦等への投与
妊婦・授乳婦への投与に関する安全性は確立していない（使用経験がない）。

6.小児等への投与
小児に対する安全性は確立していない（使用経験がない）。

7.適用上の注意
(1) 投与時
本剤は空腹時投与で吸収が低下するので、必ず食後に服用させること。なお、本剤は脂溶性であるため、食事に含まれる脂肪量が少ない場合には吸収が低下する。（添付文書の「薬物動態」の項参照）
(2) 薬剤交付時
PTP包装の薬剤はPTPシートから取り出して服用するよう指導すること。（PTPシートの誤飲により、硬い鋭角部が食道粘膜に刺入し、更には穿孔をおこして縦隔洞炎等の重篤な合併症を併発することが報告されている）

骨粗鬆症治療用ビタミンK2剤 薬価基準収載
グラケー®カプセル15mg
Glakay® <メナテトレノン製剤>

hhc ヒューマン・ヘルスケア企業　Eisai
エーザイ株式会社
〒112-8088 東京都文京区小石川4-6-10
http://www.eisai.co.jp

●ご使用に際しては添付文書をご参照ください。
資料請求先：お客様ホットライン室　0120-419-497
9～18時（土、日、祝日 9～17時）

GA0211-3　2002年11月作成

THE NEW VALUE FRONTIER

KYOCERA

Kyocera PerFix

Total Hip System

910 Series

nine-ten

Wide Mobility

広いステム可動域

Kyocera PerFix 910 Seriesのデザイン上の可動域は、骨頭径28mmの+3mmボール使用時において135度になっています。その可動域により、カップとステムネック間におけるインピンジメントの発生及び脱臼のリスクを低減させることが期待できます。

135°

910 Kyocera PerFix HAカラーレス／カラードステム［医療用具承認番号：20700BZZ00357000］
910 Kyocera PerFix Cステム［医療用具承認番号：21500BZZ00010000］
セントラライザー／ボーンプラグ［医療用具承認番号：20800BZZ00612000］

京セラ株式会社 〒612-8501 京都市伏見区竹田鳥羽殿町6
http://www.kyocera.co.jp/

バイオセラム事業部

札幌営業所 〒060-0001 札幌市中央区北1条西7-3（北一条第一生命ビル） TEL 011-222-7340 FAX 011-271-8409
東北営業所 〒980-0804 仙台市青葉区大町2-2-10（住友生命仙台青葉通ビル） TEL 022-223-7238 FAX 022-223-6812
大宮営業所 〒330-0854 さいたま市大宮区桜木町2-287（大宮西口大栄ビル2F） TEL 048-641-8373 FAX 048-642-8929
東京営業所 〒150-8303 東京都渋谷区神宮前6-27-8（京セラ原宿ビル2F） TEL 03-3797-4617 FAX 03-3486-2739
名古屋営業所 〒460-0003 名古屋市中区錦3-4-6（桜通大津第一生命ビル10F） TEL 052-962-7420 FAX 052-962-7439
京都営業所 〒612-8501 京都市伏見区竹田鳥羽殿町6 TEL 075-604-3449 FAX 075-604-3450
大阪営業所 〒532-0003 大阪市淀川区宮原3-5-24（新大阪第一生命ビル3F） TEL 06-6350-2246 FAX 06-6397-8233
岡山営業所 〒700-0904 岡山市柳町1-1-27（太陽生命岡山柳町ビル4F） TEL 086-233-2559 FAX 086-232-5907
広島営業所 〒730-0016 広島市中区幟町13-11（明治安田生命広島幟町ビル9F） TEL 082-227-6123 FAX 082-228-6399
九州営業所 〒812-0016 福岡市博多区博多駅南2-9-11（福岡山善ビル9F） TEL 092-472-6930 FAX 092-472-6938

【禁忌】(次の患者には投与しないこと)(1)消化性潰瘍のある患者(2)重篤な血液の異常のある患者(3)重篤な肝障害のある患者(4)重篤な腎障害のある患者(5)重篤な心機能不全のある患者(6)本剤の成分に過敏症の既往歴のある患者(7)アスピリン喘息(非ステロイド性消炎鎮痛剤等による喘息発作の誘発)又はその既往歴のある患者(8)妊娠末期の婦人

【効能又は効果】

①下記疾患並びに症状の消炎・鎮痛 慢性関節リウマチ、変形性関節症、腰痛症、肩関節周囲炎、頸肩腕症候群 **②手術後、外傷後並びに抜歯後の鎮痛・消炎** **③下記疾患の解熱・鎮痛** 急性上気道炎(急性気管支炎を伴う急性上気道炎を含む)

【用法及び用量】

効能又は効果①・②の場合 通常、成人にロキソプロフェンナトリウム(無水物として)1回60mg、1日3回経口投与する。頓用の場合は、1回60～120mgを経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。効能又は効果③の場合 通常、成人にロキソプロフェンナトリウム(無水物として)1回60mgを頓用する。なお、年齢、症状により適宜増減する。ただし、原則として1日2回までとし、1日最大180mgを限度とする。また、空腹時の投与は避けさせることが望ましい。

【使用上の注意】

1.慎重投与(次の患者には慎重に投与すること) (1)消化性潰瘍の既往歴のある患者 (2)非ステロイド性消炎鎮痛剤の長期投与による消化性潰瘍のある患者で、本剤の長期投与が必要であり、かつミソプロストールによる治療が行われている患者 (3)血液の異常又はその既往歴のある患者 (4)肝障害又はその既往歴のある患者 (5)腎障害又はその既往歴のある患者 (6)心機能異常のある患者 (7)過敏症の既往歴のある患者 (8)気管支喘息の患者(9)高齢者

2.重要な基本的注意 (1)消炎鎮痛剤による治療は原因療法ではなく対症療法であることに留意すること。 (2)慢性疾患(慢性関節リウマチ、変形性関節症)に対し本剤を用いる場合には、次の事項を考慮すること。ア.長期投与する場合には定期的に臨床検査(尿検査、血液検査及び肝機能検査等)を行うこと。また、異常が認められた場合には減量、休薬等の適切な措置を講ずること。イ.薬物療法以外の療法も考慮すること。

(3)急性疾患に対し本剤を用いる場合には、次の事項を考慮すること。ア.急性炎症、疼痛及び発熱の程度を考慮し、投与すること。イ.原則として同一の薬剤の長期投与を避けること。ウ.原因療法があればこれを行うこと。 (4)患者の状態を十分観察し、副作用の発現に留意すること。過度の体温下降、虚脱、四肢冷却等があらわれることがあるので、特に高熱を伴う高齢者又は消耗性疾患を合併している患者においては、投与後の患者の状態に十分注意すること。 (5)感染症を不顕性化するおそれがあるので、感染による炎症に対して用いる場合には適切な抗菌剤を併用し、観察を十分行い慎重に投与すること。 (6)他の消炎鎮痛剤との併用は避けることが望ましい。 (7)高齢者には副作用の発現に特に注意し、必要最小限の使用にとどめるなど慎重に投与すること。

3.相互作用

併用注意(併用に注意すること)

クマリン系抗凝血剤(ワルファリン)、**スルホニル尿素系血糖降下剤**(トルブタミド等)、**ニューキノロン系抗菌剤**(エノキサシン等)、**メトトレキサート**、**リチウム製剤**(炭酸リチウム)、**チアジド系利尿薬**(ヒドロフルメチアジド、ヒドロクロロチアジド等)。

4.副作用 (本項には頻度が算出できない副作用報告を含む。)総症例13,486例中副作用の報告されたものは409例(3.03%)であった。その主なものは、消化器症状(胃・腹部不快感、胃痛、悪心・嘔吐、食欲不振等2.25%)、浮腫・むくみ(0.59%)、発疹・蕁麻疹等(0.21%)、眠気(0.10%)等が報告されている。〔再審査終了時及び効能追加時〕

(1)重大な副作用 1)**ショック**(頻度不明):**アナフィラキシー様症状**(頻度不明):ショック、アナフィラキシー様症状(血圧低下、蕁麻疹、喉頭浮腫、呼吸困難等)があらわれることがあるので観察を十分に行い、異常が認められた場合には直ちに投与を中止し、適切な処置を行うこと。 2)**溶血性貧血**(頻度不明)、**白血球減少**(頻度不明)、**血小板減少**(頻度不明):溶血性貧血、白血球減少、血小板減少があらわれることがあるので、血液検査を行うなど観察を十分に行い、異常が認められた場合には直ちに投与を中止し、適切な処置を行うこと。 3)**皮膚粘膜眼症候群**(頻度不明)、**中毒性表皮壊死症**(頻度不明):皮膚粘膜眼症候群(Stevens-Johnson症候群)、中毒性表皮壊死症(Lyell症候群)があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には直ちに投与を中止し、適切な処置を行うこと。 4)**急性腎不全**(頻度不明)、**ネフローゼ症候群**(頻度不明)、**間質性腎炎**(頻度不明):急性腎不全、ネフローゼ症候群、間質性腎炎があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には直ちに投与を中止し、適切な処置を行うこと。また、急性腎不全に伴い高カリウム血症があらわれることがあるので、特に注意すること。 5)**間質性肺炎**(頻度不明):発熱、咳嗽、呼吸困難、胸部X線異常、好酸球増多等を伴う間質性肺炎があらわれることがあるので、このような症状があらわれた場合には直ちに投与を中止し、副腎皮質ホルモン剤の投与等の適切な処置を行うこと。6)**消化管出血**(頻度不明):重篤な消化性潰瘍又は小腸、大腸からの吐血、下血、血便等の消化管出血が出現し、それに伴うショックがあらわれることがあるので、観察を十分に行い、これらの症状が認められた場合には直ちに投与を中止し、適切な処置を行うこと。7)**消化管穿孔**(頻度不明):消化管穿孔があらわれることがあるので、心窩部痛、腹痛等が認められた場合には直ちに投与を中止し、適切な処置を行うこと。8)**肝機能障害**(頻度不明)、**黄疸**(頻度不明):肝機能障害(黄疸、AST(GOT)上昇、ALT(GPT)上昇、γ-GTP上昇等)、劇症肝炎があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には中止するなど適切な処置を行うこと。9)**喘息発作**(頻度不明):喘息発作等の急性呼吸障害があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には、本剤の投与を直ちに中止し、適切な処置を行うこと。10)**無菌性髄膜炎**(頻度不明):無菌性髄膜炎(発熱、頭痛、悪心・嘔吐、項部硬直、意識混濁等)があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には直ちに投与を中止し、適切な処置を行うこと(特にSLE又はMCTDの患者に発現しやすい。)。 **(2)重大な副作用(類薬)再生不良性貧血**:他の非ステロイド性消炎鎮痛剤で、再生不良性貧血があらわれるとの報告がある。

鎮痛・抗炎症・解熱剤

ロキソニン®錠 細粒

劇薬・指定医薬品 一般名:ロキソプロフェンナトリウム ■薬価基準収載

●上記以外の使用上の注意は添付文書をご覧下さい。

製造販売元(資料請求先)
三共株式会社
SANKYO 〒103-8426 東京都中央区日本橋本町3-5-1

03.3(04.1)(一)

H_2受容体拮抗剤 ―――― 薬価基準収載
指定医薬品

タガメット® 錠200・400mg 細粒20%

タガメット® 注射液 200mg

Tagamet® シメチジン

■効能・効果、用法・用量および禁忌を含む使用上の注意等につきましては添付文書をご参照下さい。

住友製薬

販売元
住友製薬株式会社（資料請求先）
〒541-8510 大阪市中央区道修町2丁目2番8号

〈製品に関するお問い合わせ先〉
住友製薬株式会社 くすり情報センター
0120-03-4389
受付時間／月～金 9:00～17:30（祝・祭日を除く）
http://e-medicine.sumitomopharm.co.jp

製造元
グラクソ・スミスクライン株式会社
東京都渋谷区千駄ヶ谷4-6-15

劇薬・指定医薬品／非ステロイド性消炎・鎮痛剤

ロルカム®錠 2mg 4mg

ロルノキシカム製剤　薬価基準収載

【禁忌（次の患者には投与しないこと）】

1. 消化性潰瘍のある患者（ただし、「慎重投与」の項参照）
2. 重篤な血液の異常のある患者
3. 重篤な肝障害のある患者
4. 重篤な腎障害のある患者
5. 重篤な心機能不全のある患者
6. 重篤な高血圧症のある患者
7. 本剤の成分に対して過敏症のある患者
8. アスピリン喘息（非ステロイド性消炎鎮痛剤等による喘息発作の誘発）又はその既往歴のある患者
9. 妊娠末期の婦人

【効能・効果、用法・用量】

効能・効果	用法・用量
○下記疾患並びに症状の消炎・鎮痛 慢性関節リウマチ、変形性関節症、腰痛症、頸肩腕症候群、肩関節周囲炎	通常、成人にはロルノキシカムとして1回4mgを1日3回食後に経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減するが、1日18mgを限度とする。
○手術後、外傷後及び抜歯後の消炎・鎮痛	通常、成人にはロルノキシカムとして1回8mgを頓用する。ただし、1回量は8mgまで、1日量は24mgまで、投与期間は3日までを限度とする。また、空腹時の投与は避けることが望ましい。

用法・用量に関連する使用上の注意　手術後、外傷後及び抜歯後の消炎・鎮痛に用いる場合、1回8mg、1日24mg及び3日間を超えて、投与された経験はなく、安全性は確立されていないので、用法・用量を遵守すること。

【使用上の注意】

1. 慎重投与（次の患者には慎重に投与すること）

(1) 消化性潰瘍の既往歴のある患者［消化性潰瘍を再発させることがある］
(2) 非ステロイド性消炎鎮痛剤の長期投与による消化性潰瘍のある患者で、本剤の長期投与が必要であり、かつミソプロストールによる治療が行われている患者［ミソプロストールは非ステロイド性消炎鎮痛剤により生じた消化性潰瘍を効能・効果としているが、ミソプロストールによる治療に抵抗性を示す消化性潰瘍もあるので、本剤を継続投与する場合には、十分経過を観察し、慎重に投与すること。］
(3) 血液の異常又はその既往歴のある患者［ヘモグロビン減少、赤血球減少、白血球減少、血小板減少が報告されているため、血液の異常を悪化あるいは再発させるおそれがある］
(4) 肝障害又はその既往歴のある患者［肝機能異常が報告されているため、肝障害を悪化あるいは再発させることがある］
(5) 腎障害又はその既往歴のある患者［腎障害を悪化あるいは再発させることがある］
(6) 心機能障害のある患者［心機能障害を悪化させるおそれがある］
(7) 高血圧症のある患者［血圧上昇が報告されているため、血圧をさらに上昇させるおそれがある］
(8) 過敏症の既往歴のある患者
(9) 気管支喘息の患者［喘息発作を誘発させるおそれがある］
(10) 高齢者［「重要な基本的注意」及び「高齢者への投与」の項参照］
(11) 小児等［「重要な基本的注意」及び「小児等への投与」の項参照］

2. 重要な基本的注意

(1) 消炎鎮痛剤による治療は原因療法ではなく対症療法であることに留意すること。
(2) 慢性疾患（慢性関節リウマチ、変形性関節症等）に対し本剤を用いる場合には、次の事項を考慮すること。
　1）長期投与する場合には定期的に臨床検査（尿検査、血液検査及び肝機能検査等）を行うこと。また、異常が認められた場合には減量、休薬等の適切な措置を講ずること。
　2）薬物療法以外の療法も考慮すること。
(3) 急性疾患に対し本剤を用いる場合には、次の事項を考慮すること。
　1）急性炎症及び疼痛の程度を考慮し、投与すること。
　2）原則として同一の薬剤の長期投与を避けること。
　3）原因療法があればこれを行うこと。
(4) 患者の状態を十分観察し、副作用の発現に留意すること。
(5) 感染症を不顕性化するおそれがあるので、感染症を合併している患者に対して用いる場合には適切な抗菌剤を併用し、観察を十分行い慎重に投与すること。
(6) 他の消炎鎮痛剤との併用は避けることが望ましい。
(7) 高齢者及び小児等には副作用の発現に特に注意し、必要最小限の使用にとどめるなど慎重に投与すること。

3. 相互作用

本剤は、主として肝代謝酵素CYP2C9で代謝される。［「薬物動態」の項参照］

併用注意（併用に注意すること）

ジゴキシン、クマリン系抗凝血剤〔ワルファリン等〕、スルホニル尿素系血糖降下剤〔トルブタミド等〕、リチウム製剤〔炭酸リチウム〕、メトトレキサート製剤〔メトトレキサート〕、チアジド系利尿薬〔ヒドロクロロチアジド等〕、アンジオテンシン変換酵素阻害剤〔エナラプリル等〕

4. 副作用

国内において総症例2,017例中282例（14.0%）392件の副作用が認められた。消化器系の副作用は191例（9.5%）に認められ、その主なものは、腹痛94件、腹部不快感37件、嘔気31件であった。肝臓系の副作用（肝機能異常、肝機能検査異常）は17例（0.8%）に認められた。その他の主な副作用としては、発疹24件であった。［承認時］

(1) 重大な副作用

1）**消化性潰瘍（穿孔を伴うことがある）**：消化性潰瘍（0.4%）があらわれることがあり、穿孔に至る場合もある（頻度不明）ので、観察を十分に行い、異常（腹痛、嘔吐、吐血・下血等を伴う胃腸出血）が認められた場合には、投与を中止し、適切な処置を行うこと。
2）**肝機能障害、黄疸（頻度不明）**：AST（GOT）、ALT（GPT）、γ-GTP、AI-P上昇等を伴う肝機能障害、黄疸があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には、投与を中止し、適切な処置を行うこと。
3）**ショック、アナフィラキシー様症状（いずれも頻度不明）**：ショック、アナフィラキシー様症状があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常（蕁麻疹、潮紅、浮腫、呼吸困難、血圧低下等）が認められた場合には、投与を中止し、適切な処置を行うこと。

(2) 重大な副作用（類薬）

他のオキシカム系消炎鎮痛剤で、以下のような副作用があらわれるとの報告がある。異常が認められた場合には、投与を中止し、適切な処置を行うこと。
1）再生不良性貧血、無顆粒球症、骨髄機能抑制
2）急性腎不全、ネフローゼ症候群
3）皮膚粘膜眼症候群（Stevens-Johnson症候群）、中毒性表皮壊死症（Lyell症候群）

※詳細につきましては製品添付文書をご参照ください。

販売元［資料請求先］
大正富山医薬品株式会社
〒170-8635 東京都豊島区高田3-25-1
製造元
大正製薬株式会社
〒170-8633 東京都豊島区高田3-24-1

2003.03　LC01A4D

PANSPORIN®

注射用セフェム系抗生物質製剤

指定医薬品、要指示医薬品（注意-医師等の処方せん・指示により使用すること）

パンスポリン®

（注射用塩酸セフォチアム）

静注用 0.25g・0.5g・1g・1g（キット品）

静注用 1gバッグS・1gバッグG

筋注用 0.25g

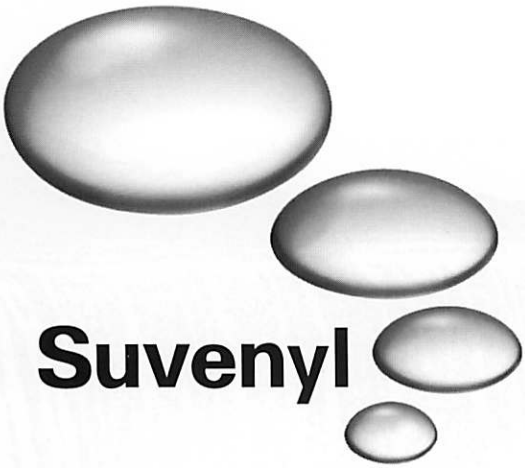
略号：**CTM**

■効能・効果、用法・用量、禁忌・使用上の注意等については、添付文書をご参照ください。　■薬価基準：収載

〔資料請求先〕
武田薬品工業株式会社
〒540-8645大阪市中央区道修町四丁目1番1号
http://www.takeda.co.jp/

(0209)

3つの関節疾患に適応を有する平均分子量190万のヒアルロン酸Naが、関節治療への新しい道を拓きます。



慢性関節リウマチにおける膝関節痛*
変形性膝関節症
肩関節周囲炎

*以下の基準を全て満たす場合に限る。
(1)抗リウマチ薬等による治療で全身の病勢がコントロールできていても膝関節痛のある場合
(2)全身の炎症症状がCRP値として10mg/dL以下の場合
(3)膝関節の症状が軽症から中等症の場合
(4)膝関節のLarsenX線分類がGrade ⅠからGradeⅢの場合

●製品特性●

1 ヒアルロン酸ナトリウム製剤として、変形性膝関節症・肩関節周囲炎に加え、初めて慢性関節リウマチにおける膝関節痛*に対する効能・効果が認められました。
2 正常関節液中に存在するヒアルロン酸に近い粘性・弾性特性を有する高分子量ヒアルロン酸ナトリウムです（in vitro）。
3 軟骨変性（ウサギ、in vitro）、炎症（サル、in vitro）および疼痛（イヌ、in vitro）に対し抑制効果が認められます。
4 関節液の潤滑（液体膜潤滑、境界潤滑）を改善します（in vitro）。
5 副作用は1,376例中42例（3.05%）にみられました。主なものは、局所疼痛12件（0.87%）等でした。（効能追加時）

関節機能改善剤
指定医薬品

薬価基準収載

スベニール® ディスポバイアル
Suvenyl®

ヒアルロン酸ナトリウム関節内注射液

【禁忌（次の患者には投与しないこと）】
本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

【効能・効果】
○変形性膝関節症、肩関節周囲炎
○慢性関節リウマチにおける膝関節痛（下記(1)～(4)の基準を全て満たす場合に限る）
(1)抗リウマチ薬等による治療で全身の病勢がコントロールできていても膝関節痛のある場合
(2)全身の炎症症状がCRP値として10mg/dL以下の場合
(3)膝関節の症状が軽症から中等症の場合
(4)膝関節のLarsenX線分類がGrade ⅠからGradeⅢの場合

【用法・用量】
○変形性膝関節症
通常、成人1回2.5mLを1週間毎に連続5回膝関節腔内に投与する。その後、症状の維持を目的とする場合は、2～4週間隔で投与する。
○肩関節周囲炎
通常、成人1回2.5mLを1週間毎に連続5回肩関節（肩関節腔、肩峰下滑液包又は上腕二頭筋長頭腱腱鞘）内に投与する。
○慢性関節リウマチにおける膝関節痛
通常、成人1回2.5mLを1週間毎に連続5回膝関節腔内に投与する。

〈用法・用量に関連する使用上の注意〉
本剤は、関節内に投与するので、厳重な無菌的操作のもとに行うこと。

【使用上の注意】—抜粋—
1.慎重投与（次の患者には慎重に投与すること）
(1)他の薬剤に対して過敏症の既往歴のある患者
(2)肝障害又はその既往歴のある患者
(3)対象関節部に皮膚疾患又は感染症のある患者
2.重要な基本的注意
(1)本剤の投与により、ときに局所痛があらわれることがあるので、投与後の局所安静を指示するなどの措置を講じること。
(2)注入部位以外に漏れると疼痛を起こすおそれがあるので、確実に投与すること。
(3)変形性膝関節症、慢性関節リウマチにおける膝関節痛については、投与関節の炎症又は関節液貯留が著しい場合、本剤の投与により当該部位の炎症症状の悪化を招くことがあるので、炎症症状を抑えてから本剤を投与することが望ましい。
(4)慢性関節リウマチにおける膝関節痛については以下の点に注意すること。
1)本剤による治療は原因療法ではなく局所に対する対症療法であるので抗リウマチ薬等と併用すること。本剤は漫然と連用する薬剤ではない。
2)抗リウマチ薬等の治療により全身の病勢がコントロールできていても膝関節痛のある場合、当該膝関節腔内に投与すること。
3)膝関節以外の使用経験はなく、他の関節については有効性・安全性が確立していないため本剤を投与しないこと。
4)慢性関節リウマチでは膝関節の器質的変化が高度なものは有効性・安全性が確立していないため本剤を投与しないこと。
5)慢性関節リウマチでは、連続5回投与後、症状の維持を目的として、原則2～3週間隔で最高10回（合計15回）までの使用経験はあるが、それ以上の安全性は確立されていない。
3.副作用
安全性評価対象症例1,376例中、42例（3.05%）54件に副作用（臨床検査値異常を含む）が認められた。
主な副作用は、投与関節での局所疼痛12件（0.87%）、ALT（GPT）上昇7件（0.51%）、AST（GOT）上昇5件（0.36%）、Al-P上昇4件（0.29%）、LDH上昇3件（0.22%）、局所熱感2件（0.15%）、発熱2件（0.15%）、発疹2件（0.15%）、倦怠感2件（0.15%）等であった。（効能追加時）
以下のような副作用が認められた場合には、減量・休薬など適切な処置を行うこと。

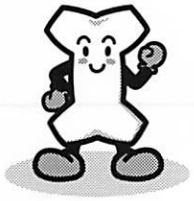
	0.1～5%未満	0.1%未満
過敏症注1)	発熱、発疹	瘙痒感
肝臓	AST（GOT）上昇、ALT（GPT）上昇、Al-P上昇、LDH上昇	
血液		好酸球増多、ヘマトクリット低下、白血球増多
投与関節	疼痛（主に投与後の一過性の疼痛）、熱感	腫脹、関節周囲のしびれ感、関節液貯留
その他	倦怠感、蛋白尿、尿沈渣異常	動悸、ほてり、総蛋白低下、BUN上昇

注1)副作用があらわれた場合には投与を中止すること。

※その他の「使用上の注意」等については製品添付文書をご参照ください。「使用上の注意」の改訂には十分ご留意ください。

製造発売元 CHUGAI
〔資料請求先〕
中外製薬株式会社
〒104-8301 東京都中央区京橋2-1-9
Roche ロシュ グループ

2003.9



骨粗鬆症治療剤

薬価基準収載

ボナロン®錠 5mg

<アレンドロン酸ナトリウム 水和物 錠>

劇薬・指定医薬品・要指示医薬品（注意：医師等の処方せん・指示により使用すること）

※ 効能･効果､用法･用量､禁忌を含む使用上の注意等については、
添付文書をご参照ください。

商標 ボナロン/Bonalon® is the registered trademark of Merck & Co.,Inc.,Whitehouse Station,NJ,USA.

製造・販売元

TEIJIN 帝人ファーマ株式会社

資料請求先：学術情報部
〒100-8585 東京都千代田区内幸町2-1-1
BNT027（KK）0308改3　2003年8月作成

十字靭帯温存型
CR新発売！

SCORPIO Super Flex

SINGLE AXIS TOTAL KNEE SYSTEM

スコーピオ SuperFlex 人工膝関節システム

深屈曲を追求したCR&PS

日本人の日常生活で必要な
膝の深い屈曲を実現するために開発された
人工膝関節です。

■軟部組織にフレンドリー

屈曲位における側副靭帯の緊張を和らげることにより、より深い屈曲角度の獲得を実現しました。

■スコーピオのベネフィットに深い屈曲が追加

自動完全伸展が容易、膝前方痛の低下、靭帯安定性の改善というスコーピオ人工膝関節のベネフィットに更に深い屈曲角度の獲得というベネフィットが加わりました。

■骨の温存

CR&PS型とも深い屈曲を実現するための追加骨切りが不要です。また、PSは後方安定型として最も骨を多く温存することが可能なシステムです。

■高い安全性

様々な試験でスコーピオ人工膝関節と同等またはそれ以上の安全性を持つことが確認されています。

医療用具承認番号:21200BZY00582000

stryker®

輸入販売元：
日本ストライカー株式会社
〒151-0053 東京都渋谷区代々木3-25-3 TEL (03)5352-9080 http://www.stryker.co.jp

札幌	TEL (011) 700-1120	横浜	TEL (045) 439-5011	大阪	TEL (06) 6479-0001
仙台	TEL (022) 301-7120	名古屋	TEL (052) 238-5545	広島	TEL (082) 235-3205
東京	TEL (03) 5958-4010	金沢	TEL (076) 223-5261	福岡	TEL (092) 434-6470

NOVARTIS

1974

鎮痛・抗炎症剤　薬価基準収載

ボルタレン®錠

劇薬 指定医薬品 要指示医薬品 注意－医師等の処方せん・指示により使用すること

Voltaren® ジクロフェナクナトリウム錠

1982

鎮痛・解熱・抗炎症剤　薬価基準収載

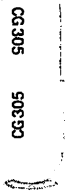
ボルタレン®サポ®

12.5mg
25mg
50mg

劇薬 指定医薬品 要指示医薬品 注意－医師等の処方せん・指示により使用すること

Voltaren® SUPPO® ジクロフェナクナトリウム坐剤

1990



徐放性鎮痛・抗炎症剤　薬価基準収載

ボルタレン®SRカプセル

劇薬 指定医薬品 要指示医薬品 注意－医師等の処方せん・指示により使用すること

Voltaren® SR Capsules ジクロフェナクナトリウムカプセル

2000

経皮鎮痛消炎剤　薬価基準収載

ボルタレン®ゲル

指定医薬品

Voltaren® Gel ジクロフェナクナトリウム軟膏

VOLTAREN

●効能・効果、用法・用量、警告、禁忌、使用上の注意等につきましては、製品添付文書をご参照ください。

ボルタレンSRカプセル、ボルタレンゲルの製造は同仁医薬化工株式会社、ボルタレン錠、ボルタレンサポの製造は日本チバガイギー株式会社です。

販売
ノバルティス ファーマ株式会社
東京都港区西麻布4-17-30 〒106-8618

（資料請求先）
NOVARTIS DIRECT
0120-003-293
www.novartis.co.jp/direct/

2003年10月作成

腰痛症や変形性関節症等へ一日、一回。

経皮鎮痛消炎剤　　薬価基準収載

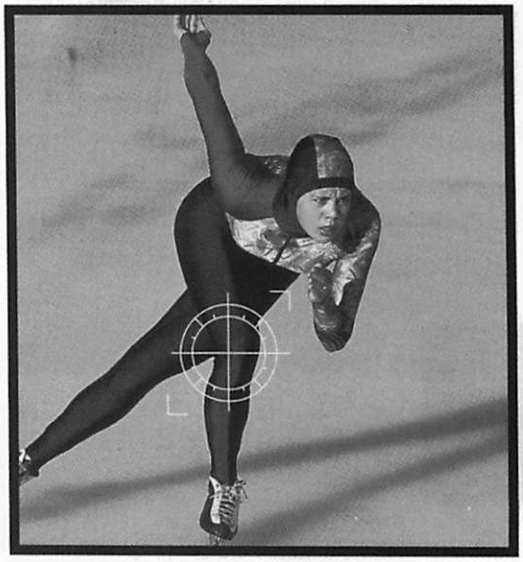
指定医薬品 **モーラステープ®**
<ユートク>

指定医薬品 **モーラステープL®**
<ユートク>

11

【ケトプロフェン2%】

慢性
疼痛性疾患に
有用です。



- ●ケトプロフェンの経皮吸収性，組織への浸透性が高く，局所濃度を持続的に維持できます。
- ●副作用発現率は4.93%（57例／1,156例）で主に瘙痒感，発疹，発赤などの接触皮膚炎でした。（モーラステープ承認時）
- ●重大な副作用として，アナフィラキシー様症状，喘息発作の誘発（アスピリン喘息），接触皮膚炎，光線過敏症が報告されています。
- ●伸縮性・柔軟性・粘着性に優れ，使用感が良好です。

【禁忌】（次の患者には使用しないこと）
(1) 本剤又は本剤の成分に対して過敏症の既往歴のある患者
（「重要な基本的注意」の項(1)参照）
(2) アスピリン喘息（非ステロイド性消炎鎮痛剤等による喘息発作の誘発）又はその既往歴のある患者［喘息発作を誘発するおそれがある。］
(3) チアプロフェン酸，スプロフェン，フェノフィブラート及びオキシベンゾンに対して過敏症の既往歴のある患者［ケトプロフェンと交叉感作性を有することが知られており，本剤の使用によって過敏症を誘発するおそれがある。］

【効能・効果】
下記疾患の慢性症状（血行障害，筋痙縮，筋拘縮）を伴う場合の鎮痛・消炎
腰痛症（筋・筋膜性腰痛症，変形性脊椎症，椎間板症，腰椎捻挫），変形性関節症，
肩関節周囲炎，腱・腱鞘炎，腱周囲炎，上腕骨上顆炎（テニス肘等）

【効能・効果に関連する使用上の注意】
(1) 局所熱感，腫脹等を伴う急性期には有効性が確認されていないので使用しないこと。
(2) 本剤の使用により重篤な接触皮膚炎，光線過敏症が発現することがあり，中には重度の全身性発疹に進展する例が報告されているので，疾病の治療上の必要性を十分に検討の上，治療上の有益性が危険性を上回る場合にのみ使用すること。

【用法・用量】
1日1回患部に貼付する。

【使用上の注意】
1.慎重投与（次の患者には慎重に使用すること）
気管支喘息のある患者［アスピリン喘息患者が潜在しているおそれがある。］
（「重大な副作用」の項2）参照）

2.重要な基本的注意
(1) 本剤又は本剤の成分により過敏症（紅斑，発疹・発赤，腫脹，刺激感，瘙痒等を含む）を発現したことのある患者には使用しないこと。
(2) 接触皮膚炎又は光線過敏症を発現することがあり，中には重度の全身性発疹に至った症例も報告されているので，使用前に患者に対し次の指導を十分に行うこと。（「重大な副作用」の項3) 4) 参照）
1) 紫外線曝露の有無にかかわらず，接触皮膚炎を発現することがあるので，発疹・発赤，瘙痒感，刺激感等の皮膚症状が認められた場合には，直ちに使用を中止し，患部を遮光し，受診すること。なお，使用後数日を経過して発現する場合があるので，同様に注意すること。
2) 光線過敏症を発現することがあるので，使用中は天候にかかわらず，戸外の活動を避けるとともに，日常の外出時も，本剤貼付部を衣服，サポーター等で遮光すること。なお，白い生地や薄手の服は紫外線を透過するおそれがあるので，紫外線を透過させにくい色物の衣服などを着用すること。また，使用後数日から数カ月を経過して発現することもあるので，使用後も当分の間，同様に注意すること。
(3) 消炎鎮痛剤による治療は原因療法ではなく，対症療法であることに留意すること。
(4) 皮膚の感染症を不顕性化するおそれがあるので，感染を伴う炎症に対して用いる場合には適切な抗菌剤又は抗真菌剤を併用し，観察を十分に行い慎重に投与すること。
(5) 本剤による治療は対症療法であるので，症状に応じて薬物療法以外の療法も考慮すること。また，投与が長期にわたる場合には患者の状態を十分に観察し，副作用の発現に留意すること。

3.相互作用
［併用注意］（併用に注意すること）

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
メトトレキサート	ケトプロフェン経口剤とメトトレキサートの併用によりメトトレキサートの作用が増強されることがある。	ケトプロフェンとメトトレキサートを併用した場合，メトトレキサートの腎排泄が阻害されることが報告されている。

4.副作用
総症例1,156例中副作用が報告されたのは57例（4.93%）であり，発現した副作用は，発疹11件，発赤9件，瘙痒感18件，刺激感5件等の接触皮膚炎54件（4.67%），貼付部の膨疹，動悸，顔面及び手の浮腫各1件（0.09%）などであった。（モーラステープ承認時）
ほかに医師などの自発的報告により，アナフィラキシー様症状，喘息発作の誘発（アスピリン喘息），光線過敏症の発現が報告されている。

(1) 重大な副作用
1) アナフィラキシー様症状（0.1%未満）
アナフィラキシー様症状（蕁麻疹，呼吸困難，顔面浮腫等）があらわれることがあるので，このような症状があらわれた場合には使用を中止すること。
2) 喘息発作の誘発（アスピリン喘息）（0.1%未満）
喘息発作を誘発することがあるので，乾性ラ音，喘鳴，呼吸困難感等の初期症状が発現した場合は使用を中止すること。気管支喘息患者の中には約10%のアスピリン喘息患者が潜在していると考えられているので留意すること。なお，本剤による喘息発作の誘発は，貼付後数時間で発現している。（「禁忌」の項(2)参照）
3) 接触皮膚炎（5%未満，重篤例は頻度不明）
本剤貼付部に発現した瘙痒感，刺激感，紅斑，発疹・発赤等が悪化し，腫脹，浮腫，水疱・びらん等の重度の皮膚炎症状や色素沈着，色素脱失が発現し，さらに**全身に皮膚炎症状が拡大し重篤化する**ことがあるので，異常が認められた場合には直ちに使用を中止し，患部を遮光し，適切な処置を行うこと。なお，使用後数日を経過してから発現することもある。
4) 光線過敏症（頻度不明）
本剤の貼付部を紫外線に曝露することにより，強い瘙痒を伴う紅斑，発疹，刺激感，腫脹，浮腫，水疱・びらん等の重度の皮膚炎症状や色素沈着，色素脱失が発現し，さらに**全身に皮膚炎症状が拡大し重篤化する**ことがあるので，異常が認められた場合には直ちに使用を中止し，**患部を遮光し**，適切な処置を行うこと。なお，使用後数日から数カ月を経過してから発現することもある。

(2) その他の副作用

分類＼頻度	頻度不明	0.1～5%未満	0.1%未満
皮　膚(注)		局所の発疹，発赤，腫脹，瘙痒感，刺激感，水疱・びらん，色素沈着等	皮下出血
過敏症(注)	蕁麻疹，眼瞼浮腫，顔面浮腫		

注）このような症状があらわれた場合は直ちに使用を中止すること。

※その他の使用上の注意については添付文書をご参照ください。

資料請求先　祐徳薬品工業株式会社 学術グループ
佐賀県鹿島市大字納富分2596番地1

2004年3月作成

骨粗鬆症治療剤

アクトネル® 錠2.5mg

リセドロン酸ナトリウム水和物錠　●薬価基準収載

劇薬　指定医薬品　要指示医薬品注)　注)注意ー医師等の処方せん・指示により使用すること

★「効能・効果」「用法・用量」「禁忌を含む使用上の注意」等については現品添付文書をご参照ください。
★資料はアベンティス ファーマ(株)またはエーザイ(株)医薬情報担当者にご請求ください。

製　造：AJINOMOTO. 味の素株式会社　〒104-8315　東京都中央区京橋一丁目15番1号
販　売：アベンティス ファーマ株式会社　〒107-8465　東京都港区赤坂二丁目17番51号
販売提携：エーザイ株式会社　〒112-8088 東京都文京区小石川4-6-10

2003年5月作成　ACT・JA42・A0305MC

骨粗鬆症治療用ビタミンK2剤　薬価基準収載

グラケー® カプセル15mg

Glakay®＜メナテトレノン製剤＞

【禁忌】（次の患者には投与しないこと）
ワルファリンカリウム投与中の患者

【効能・効果】
骨粗鬆症における骨量・疼痛の改善

【用法・用量】
通常、成人にはメナテトレノンとして1日45mgを3回に分けて食後に経口投与する。

【使用上の注意】
1.重要な基本的注意
(1) 本剤の適用にあたっては、厚生省「老人性骨粗鬆症の予防及び治療法に関する総合的研究班」の診断基準（骨量減少の有無、骨折の有無、腰背痛の有無などの総合による）等を参考に、骨粗鬆症との診断が確立し、骨量減少・疼痛がみられる患者を対象とすること。
(2) 発疹、発赤、瘙痒等があらわれた場合には投与を中止すること。

2.相互作用
併用禁忌（併用しないこと）
ワルファリンカリウム（ワーファリン）

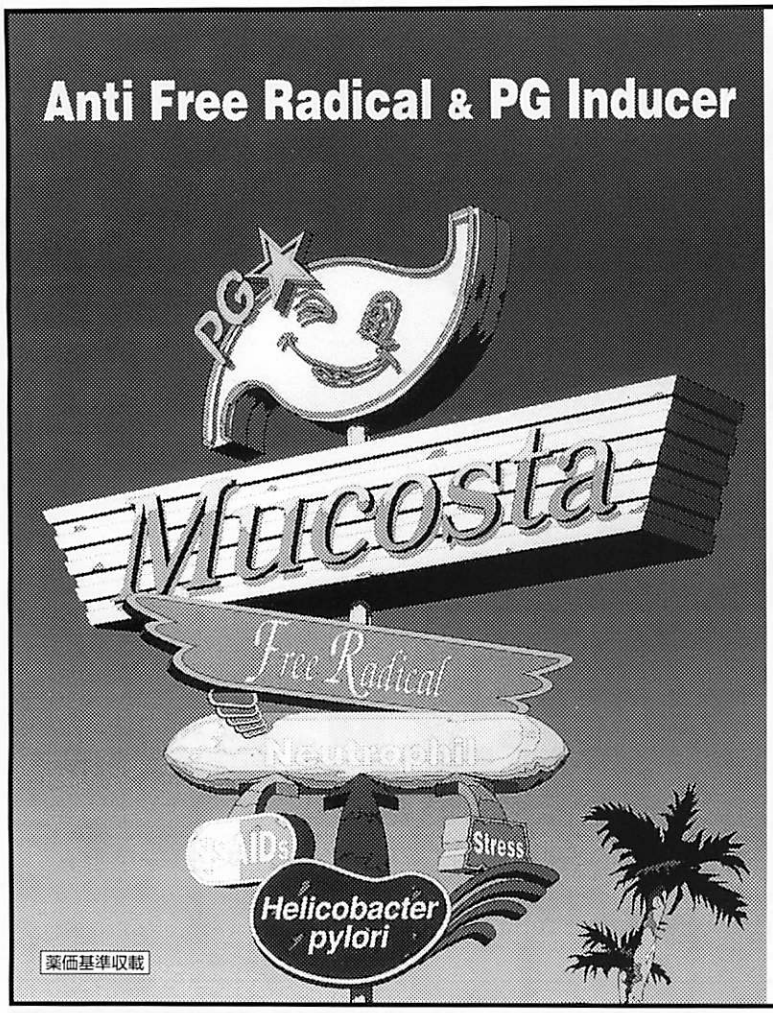
3.副作用
総症例1885例中、81例（4.30%）の副作用が報告されている。（承認時及び市販後第1回使用成績調査の累計）

	0.1～5%未満	0.1%未満	頻度不明
消化器	胃部不快感、腹痛、悪心、下痢、消化不良	口渇、食欲不振	嘔吐、口内炎
過敏症	発疹、瘙痒、発赤		
精神神経系	頭痛	ふらつき	めまい
肝臓	AST(GOT)、ALT(GPT)、γ-GTPの上昇等		
腎臓	BUNの上昇等		
その他	浮腫		

●その他の使用上の注意については添付文書をご参照ください。

hhc ヒューマン・ヘルスケア企業　Eisai
エーザイ株式会社　〒112-8088 東京都文京区小石川4-6-10　http://www.eisai.co.jp
資料請求先：お客様ホットライン室　0120-419-497　9～18時（土、日、祝日 9～17時）

GA0211-1　2002年11月作成



〔禁　忌〕(次の患者には投与しないこと)
本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

〔効能・効果〕及び〔用法・用量〕

〔効能・効果〕	〔用法・用量〕
胃潰瘍	通常、成人には1回1錠(レバミピドとして100mg)を1日3回、朝、夕及び就寝前に経口投与する。
下記疾患の胃粘膜病変(びらん、出血、発赤、浮腫)の改善 急性胃炎、慢性胃炎の急性増悪期	通常、成人には1回1錠(レバミピドとして100mg)を1日3回経口投与する。

〔使用上の注意〕 ―抜粋―
副作用
調査症例10,047例中54例(0.54%)に臨床検査値の異常を含む副作用が認められている。このうち65才以上の高齢者3,035例では18例(0.59%)に副作用がみられた。副作用発現率、副作用の種類においても高齢者と非高齢者で差は認められなかった。以下の副作用には別途市販後に報告された自発報告を含む。(承認時～2001年6月までの集計)
重大な副作用
1.白血球減少(0.1%未満)、血小板減少(頻度不明*)：白血球減少、血小板減少があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
2.肝機能障害(0.1%未満)、黄疸(頻度不明*)：AST(GOT)、ALT(GPT)、γ-GTP、AI-Pの上昇等を伴う肝機能障害、黄疸があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
*：自発報告において認められた副作用のため頻度不明。
◇その他の使用上の注意等は、製品添付文書をご参照ください。

胃炎・胃潰瘍治療剤　指定医薬品
ムコスタ®錠100
Mucosta® tablets　レバミピド錠

製造発売元
大塚製薬株式会社
東京都千代田区神田司町2-9

資料請求先
大塚製薬株式会社 学術部
〒101-8535 東京都千代田区神田司町2-2
大塚製薬 神田第2ビル

〈'01.09作成〉

ARTZ®
ARTZ Dispo®
●薬価基準収載

ARTZ FDA承認 SUPARTZ
アルツが"SUPARTZ"としてFDA承認となりました

関節機能改善剤(ヒアルロン酸ナトリウム関節内注射液)

指定医薬品
アルツ®

指定医薬品
アルツディスポ®
ブリスター包装内滅菌済

●効能・効果、用法・用量、禁忌、使用上の注意等の詳細は、製品添付文書をご参照ください。

〔製造元〕
生化学工業株式会社
東京都中央区日本橋本町2-1-5

発売元　〔資料請求先〕
科研製薬株式会社
〒113-8650 東京都文京区本駒込二丁目28-8

(2002年12月作成)　02Z

フルマリン®
キット静注用1g
オキサセフェム系抗生物質製剤
指定医薬品，要指示医薬品 注1)
フルマリン®キット静注用1g
注射用フロモキセフナトリウム 略号 FMOX Flumarin®
注1）注意－医師等の処方せん・指示により使用すること
■薬価基準収載 ■「効能・効果」,「用法・用量」,「禁忌」,「原則禁忌」,「使用上の注意」等については添付文書をご参照下さい。 ®：登録商標
〔資料請求先〕塩野義製薬株式会社 〒541-0045 大阪市中央区道修町3-1-8
シオノギ製薬
2003.4.A42

針刺し事故のリスクが
低減されます。
ETHIGUARD*
blunt point needle
エチガード* ニードル
医療現場での安全性を
考え続けています。
CONTROL-RELEASE*
ワンタッチで糸が抜け、スピーディーな結節縫合が可能です。
RELAY*
針に手を触れることなく把持できます。
Professional
Educational Programs
ORナース向け 縫合糸勉強会を開催します。
ETHICON
a Johnson & Johnson company
ETHICON
ジョンソン・エンド・ジョンソン 株式会社
エチコン マーケティング
〒135-0016 東京都江東区東陽6丁目3番2号
TEL 03(5632)7171 FAX 03(5632)7371
＊商標©J&J1999

住友製薬

ボーンセラム® BONECERAM

水酸アパタイト骨補填材料
ボーンセラム® P
医療用具承認番号16200BZZ01201

水酸アパタイト人工骨材料
ボーンセラム® K
医療用具承認番号20600BZZ00403

ボーンセラム® P

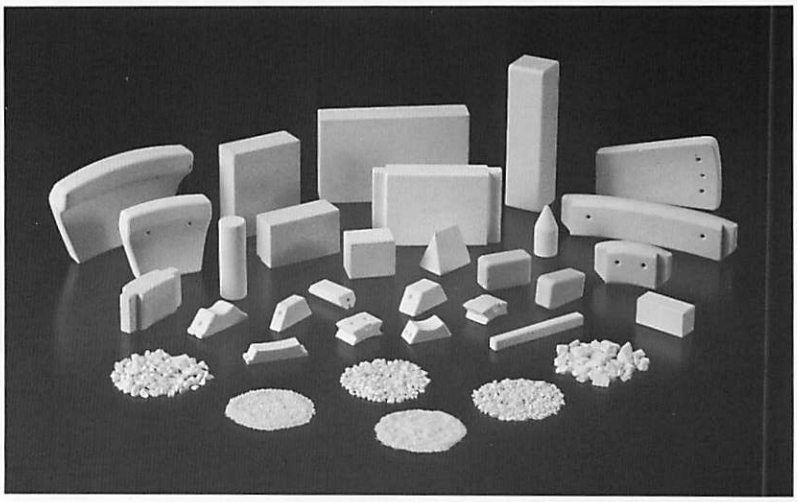
ボーンセラムPは、バイオファンクショナルな機能設計に基づいて製造された多孔質ハイドロキシアパタイトです。

■特 長
1．骨動態学的特性を有しています。
2．生体適合性が優れています。
3．加工性に優れ、取扱が容易です。
4．真球状の気孔構造を有し、機械的強度が優れています。
5．臨床的有用性が認められています。
■性能、使用目的、効能又は効果
骨又は関節手術における骨補塡

ボーンセラム® K

ボーンセラムKは、生体適合性に優れているボーンセラムPと同成分を有する緻密質ハイドロキシアパタイトです。

■特 長
1．機械的強度がボーンセラムPより優れています。
2．骨組織と直接結合します。
■性能、使用目的、効能又は効果
骨又は関節手術における骨修復、骨補塡又は骨充塡



製造元
住友大阪セメント株式会社
東京都千代田区六番町6番地28
販売元
住友製薬株式会社
大阪市中央区道修町2丁目2番8号

連絡先		
住友製薬株式会社 医療材料部	大阪市中央区伏見町2丁目1番1号	TEL(06)6229−5649
	東京都中央区京橋1丁目12番2号	TEL(03)5159−2538
	仙台市青葉区大町2丁目2番10号	TEL(022)261−2651
	名古屋市東区代官町35番16号	TEL(052)935−3681
	福岡市博多区博多駅前1丁目2番5号	TEL(092)431−6671

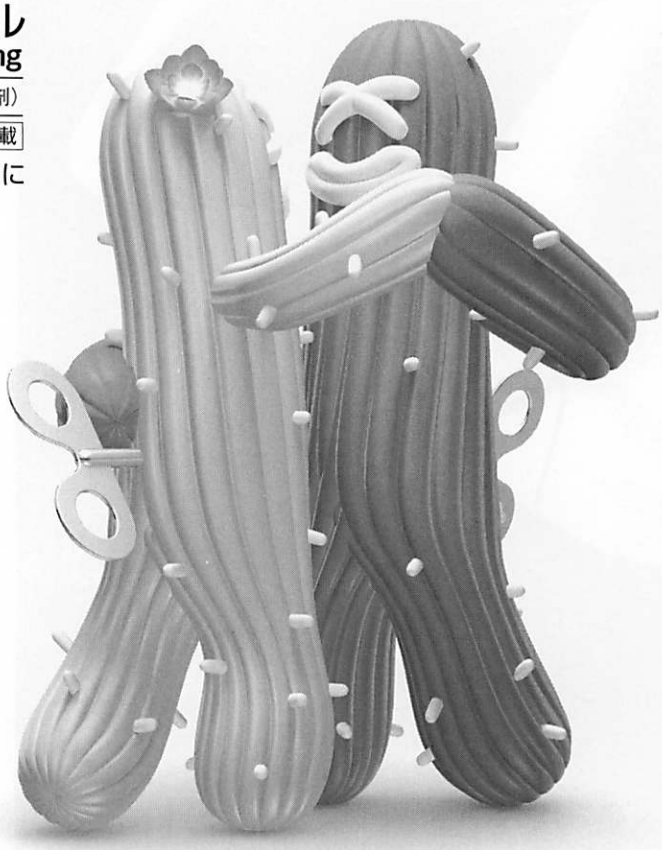
非ステロイド性消炎・鎮痛剤　劇薬、指定医薬品

モービック®カプセル 5mg・10mg

Mobic® Capsules 5mg・10mg（メロキシカム製剤）

薬価基準収載

※効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については添付文書等をご覧ください。



製造発売元
Boehringer Ingelheim
日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社
本社・研究所／〒666-0193兵庫県川西市矢問3-10-1
資料請求先：学術情報部
〒101-0064 東京都千代田区猿楽町2-8-8 住友不動産猿楽町ビル13階

発売元
第一製薬株式会社
資料請求先
東京都中央区日本橋三丁目14番10号

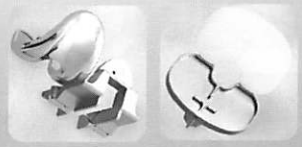
2003年1月作成（2001.5）

Balanced Knee™ System

Balance—in the Hands of Every Surgeon

ODCバランスド ニー システム

The Balanced Knee™ Systemは
再現性のある結果を導くことができる
使い易い手術器械によって、
適切な組織バランスとアライメントを
実現できるように
デザインされています。



ORTHO DEVELOPMENT

医療用具承認番号 21300BZY00003000
20800BZY00029000
医療用具許可番号 13BZY0697

輸入総発売元
株式会社日本エムディエム
〒162-0066
本　　社／東京都新宿区市谷台町12-2
東京営業所 TEL. 03(3341)6688(直通)

札　幌営業所 TEL. 011(210)6691(代)
盛　岡営業所 TEL. 019(623)0991(代)
仙　台営業所 TEL. 022(213)0591(代)
さいたま営業所 TEL. 048(851)0300(代)
千　葉営業所 TEL. 043(296)6011(代)
横　浜営業所 TEL. 045(476)1771(代)
名古屋営業所 TEL. 052(731)5020(代)
金　沢営業所 TEL. 076(223)8805(代)
京　都営業所 TEL. 075(352)4110(代)
大　阪営業所 TEL. 06(6399)9730(代)
神　戸営業所 TEL. 078(392)8770(代)
高　松営業所 TEL. 087(833)9121(代)
広　島営業所 TEL. 082(243)5371(代)
福　岡営業所 TEL. 092(475)1211(代)
熊　本営業所 TEL. 096(322)9011(代)

指定医薬品

下行性疼痛抑制系賦活型
疼痛治療剤（非オピオイド、非シクロオキシゲナーゼ阻害）

ノイロトロピン®錠

ワクシニアウイルス接種家兎炎症皮膚抽出液含有製剤
〈薬価基準収載〉

［効能・効果］
帯状疱疹後神経痛、変形性関節症、腰痛症
頸肩腕症候群、肩関節周囲炎

〈効能・効果に関連する使用上の注意〉
帯状疱疹後神経痛に用いる場合は、帯状疱疹痛発症後6ヵ月以上経過した患者を対象とすること。（帯状疱疹痛発症後6ヵ月未満の患者に対する効果は検証されていない。）

［用法・用量］
通常、成人1日4錠を朝夕2回に分けて経口投与する。
なお、年齢、症状により適宜増減する。

〈用法・用量に関連する使用上の注意〉
帯状疱疹後神経痛に対しては、4週間で効果の認められない場合は漫然と投薬を続けないよう注意すること。

禁忌（次の患者には投与しないこと）：本剤に対し過敏症の既往歴のある患者

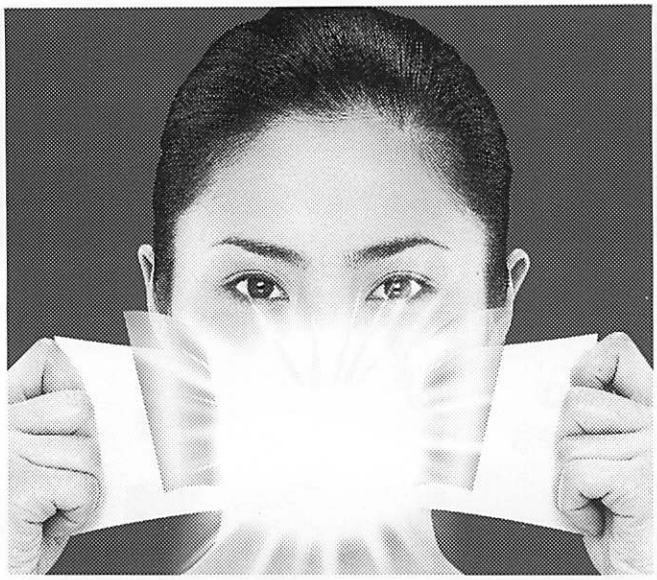
※「使用上の注意」などについては添付文書をご参照ください。

資料請求先：日本臓器製薬株式会社 学術部

日本臓器製薬
〒541-0046 大阪市中央区平野町2丁目1番2号 ☎06(6203)0441

Hisamitsu

MOHRUS



指定医薬品　〔薬価基準収載〕

経皮鎮痛消炎剤　ケトプロフェン貼付剤

モーラス®

●効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については製品添付文書をご参照下さい。

2003年6月作成

資料請求先

久光製薬株式会社

学術部　〒100-6221

東京都千代田区丸の内1-11-1 PCPビル21F

Fujisawa

MRSA

Targocid®

グリコペプチド系抗生物質製剤　薬価基準収載

注射用タゴシッド®

（略号：TEIC）＜注射用テイコプラニン＞

劇薬・指定医薬品・要指示医薬品注）　注）注意－医師等の処方せん・指示により使用すること

★効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等につきましては、製品添付文書をご参照下さい。
「禁忌を含む使用上の注意」の改訂には十分ご留意下さい。

販売　資料請求先

藤沢薬品工業株式会社

大阪市中央区道修町3-4-7　〒541-8514

輸入

アベンティス ファーマ株式会社

東京都港区赤坂二丁目17番51号

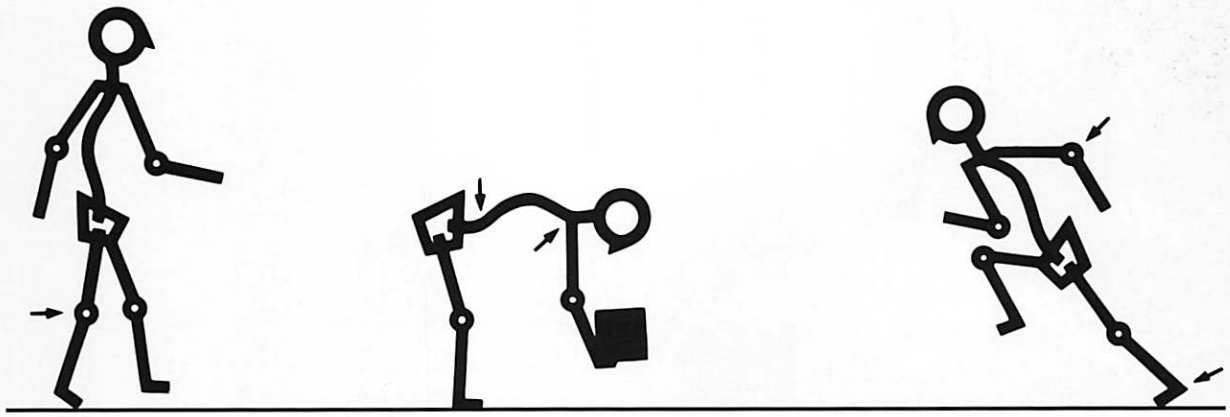
作成年月2003年2月

薬価基準収載

経皮複合消炎剤

モビラート®軟膏

● 効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については添付文書をご参照ください。



〔資料請求先〕

製造販売 maruho マルホ株式会社

大阪市北区中津1-5-22 〒531-0071

(2003.9作成)

プロスタグランジンE1製剤

リプル®注5μg・10μg

アルプロスタジル注射液

劇薬、指定医薬品、要指示医薬品

Liple® INJECTION

※〈警告〉〈禁忌〉〈効能又は効果〉〈用法及び用量〉〈使用上の注意〉等の詳細については、製品添付文書をご参照ください。

〈薬価基準収載〉

製造発売元

三菱ウェルファーマ株式会社

大阪市中央区平野町2-6-9

〈資料請求先〉製品情報部

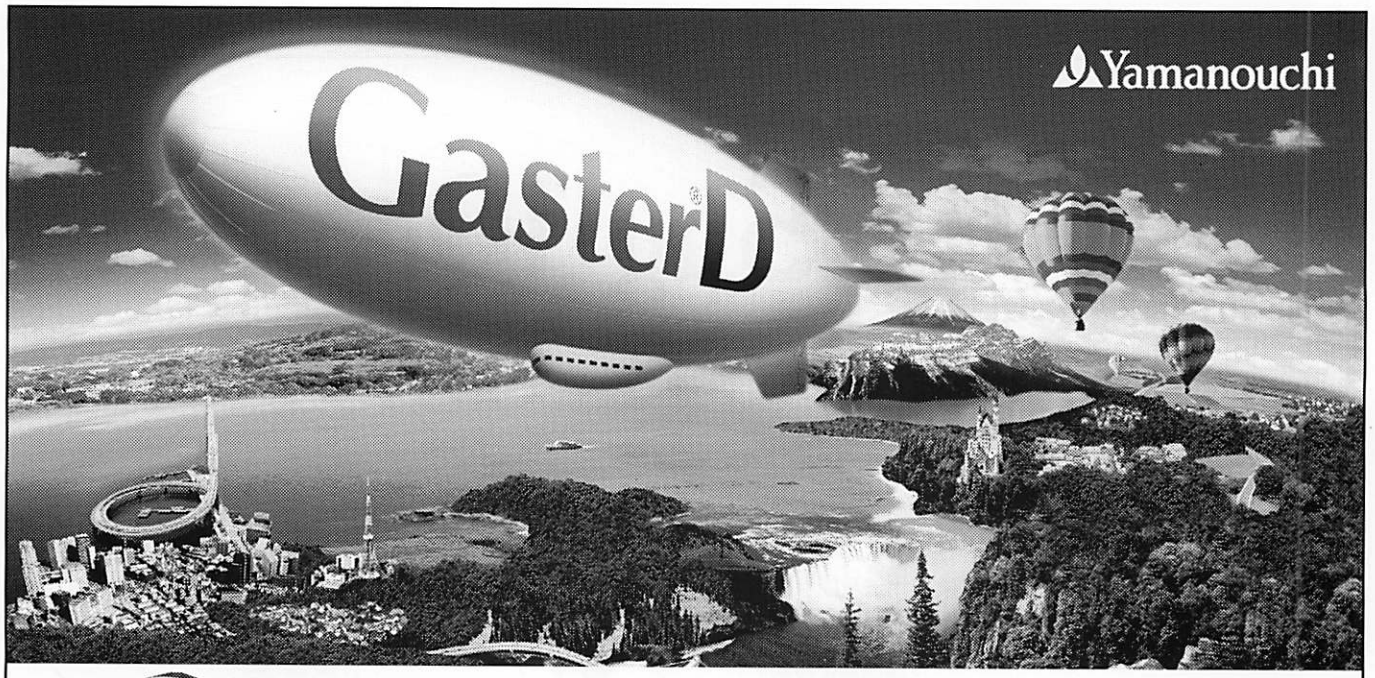
〒541-0047 大阪市中央区淡路町2-5-6

LIP-(A4 1/2) 2002年3月作成

注）注意－医師等の処方せん・指示により使用すること
※効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等、
詳細は製品添付文書をご参照ください。

〔資料請求先〕 Meiji 明治製薬株式会社
104-8002東京都中央区京橋2-4-16

作成：2000.1



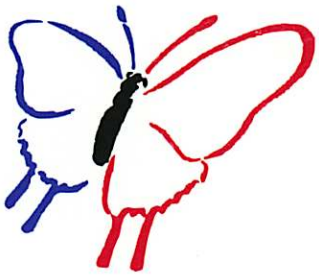
H_2受容体拮抗剤
ファモチジン口腔内崩壊錠

指定医薬品　薬価収載
ガスター®D錠 10mg 20mg

製造発売元〔資料請求先〕山之内製薬株式会社　〒103-8411 東京都中央区日本橋本町 2-3-11

●禁忌、効能・効果、用法・用量、使用上の注意等については、製品添付文書をご参照ください。

03/9作成 A4½.C.02

消化器診療のための情報提供サイト GasterOnline
http://www.yamanouchi.com/jp/

●医療関係者サイトよりアクセスしてください。●詳しい情報をご入用の方は山之内製薬株式会社の医薬情報担当者（MR）にお申し付けください。